

第五章 スチルナアのイデオロギー論

一、彼の時代的環境

スチルナアは十九世紀前半の人であつた（一八〇六—一八六五）。彼のイデオロギー論について見る前に、先づその時代の状況を概観しよう。

「今やドイツにおいては、既にフランスやイギリスで終りかけてゐることが漸く始められかけてゐる。」従つて『假りに私が一八四三年のドイツの現狀を否定するとしても私はフランスの年代記に従へば、私は辛うじて一七八九年に立つてゐる位のもので、到底現代の焦點に達するところではない』とマルクスが記した。⁽¹⁾ 十九世紀中葉においてもドイツは如何に封建主義的な殘滓によつて充滿されてゐるかはこれによつて伺はれる。イギリスは既に一七七〇年代に産業革命期に入り、フランスはイギリスの機械輸出の禁止が解かれた一八二五年頃に産業革命

が始まつたと謂はれるが、ドイツでは十九世紀の中葉に至つて始めて産業革命が展開したのである。

宗教革命（一五一七—五五）、農民戦争（一五二二—五）、三十年戦争（一六一八—四八）と續く動亂のためにドイツは極度に疲弊し、神聖羅馬帝國といふ有名無實なものの下に諸小國が對峙してゐた。ブロイセンのフリードリヒ大帝が出るに及んで時局は漸次に収集され、その絶対王制によつて封建的殘骸は徐々に除去された。十九世紀初頭のドイツは完全に農業國であった。人口の八割は農民で、農村では尙農奴制による自足經濟が行はれ、都市には主としてツンフト的手工業が行はれた。家内工業や小工場工業や鑄山業等は未發達である。外國貿易は戦争や大陸封鎖によつて大打撃を被り、經濟區域は州の關稅圈によつて區割されてゐる。交通は未發達だし、貨幣制度は區々であつた。

フリードリヒ大帝の統治する專制的貴族的なブロイセン國家の興隆は、ウンケルトームの優勢を齎した。この封建貴族は十六世紀以來確立されたもので、當時における農業革命と共に大農場經營に從事し、火酒の醸造や甜菜糖業に從事した。彼等は無抵抗な農民を徹底的に搾取

してプロレタリアに拡へ上げたことによつて確に資本主義の發展に貢献したが、彼等の勢力はドイツ・ブルジョアジーの伸長を阻害したのである。

ドイツ資本主義の萌芽は併し既に漸次に育まれて來た。一般的な貧窮化にも拘らず古くから商業地や港町に多大の資本が蓄積されてゐる。その上に十八世紀の專制政治のための多額な王室費や軍隊費、増大する税金や國債、獨占的特權的保護關稅的な經濟が、資本主義的生產の原動力となつたのである。ユンケルと共に一部の資本家がその利益に均霑し、そこに資本主義的生產の最も原初的な形態である家内工業が發達した。東ドイツではシュレーデンとザクセンがその中心地であつた。東ドイツの工業中心地がまた多くの封建的泥沼のうちに在る間に、西ドイツの工業中心地は顯著な發展をとげた。ドイツにおける最良の水道を有ち、海岸に近く、その上多量の鉱產を包藏してゐたために、古くからの自然發生的な產業は一七九五年以來のフランス支配の下に急激な發達を見るに至つたのである。

ナポレオン戦争はドイツに一大衝撃を與へた。諸侯は實力を失ひ、アンサン・レジームの清掃が漸次に行はれた。フランスに割譲されたフランス左岸にライン同盟を組織し、行政上司法

上の改革のみならず、土地賣買の自由、營業の自由、ユダヤ人の解放、都市の自治等が實現され、資本主義發展の地盤が備つた。ブロイセンは一八〇六年及び七年のエナ及びアウステルリツの敗戦によつてその官僚的貴族的腐敗を曝露し、先進資本主義國に對峙するためにも一大改革が必要となつた。シ・タインとハルデンベルクが出て封建的な身分關係を打破し自由主義の實現に努めた。一八〇七年に『解放勅令』が發布された。その實質は農奴解放金でこれによつて土地財產の使用所有の自由、職業選擇の自由、世襲的な隸屬關係の解放（一八一〇年十一月より實施）等が法律的に確立された。初めは農民占有地の無償私有財產化が提案されたが、領主達の反対によつて一八一一年の勅令が發布されるに至つた。それによれば、農民が貢租賦役の負擔から解放され、完全な所有權を獲得するには、世襲的占有地においてはその三分の一を、その他の占有地においてはその二分の一を領主に提供し、且從來領主から受けてゐた利益を拋棄する必要があつた。この勅令のために領主達の大農場は勞力の不足を見るに至つたので彼等は更に反対し、つひに一八一六年の修正となつた。それにおいては自らその收入によつて一家を支へるだけの土地及び設備を有しない農民並びにその権利を地方の土地臺帳に登録して

むない土地は、勅令の適用を受けることが出来なかつた。従つて大部分の土地は又領主の手中に戻り、農民は法律的に自由になつて經濟的に農業労働者に墮ちるに至つた。農民はもとよりその貧窮の生活にたへることが出来なかつた。一八四八年のフランスの二月革命の影響を受けてドイツの諸處に暴動が起り、ついに一八五〇年の法律によつて徹底的な農奴解放が行はれ、ここに封建的な土地關係が始めて排除されたのである。

都市においては、十九世紀の三十年代まではツンフトの手工業が優勢を占めた。凡ゆる技術的進歩をよそにして小都市の重苦しい狭隘の中に漠然として植物的存在を續けながら、先祖代のしきたりによつて地方消費のために働いてゐたのである。一八〇八年に發布されたプロイセンの『都市制』は都市自治の基礎を敷き、ツンフト及び身分による市民の區分を廢して地區による區分を採用した。更に一八一〇年の勅令は營業自由を許し、一八一年の勅令はその具體的な事實を規定して、ツンフトの獨占と特權を法律的に否定したが、併しこれらは要するに空文にすぎず、ツンフトは依然として勢力を占めてゐた。尤も既に十八世紀に發達した專制政治の資本主義的政策は漸次にツンフトを壓迫し、殊に家内工業及び工場手工業の發達はツンフトを動搖せしめ、十九世紀の四十年代には没落する手工業者の問題が主要な社會問題となつたのである。ラインブルイゼン、ラインバイエルン、ラインヘッセンにおいて封建制度が止めを刺された時に至つて始めてツンフトは一掃され、個人の經濟活動の自由が確立されたのである。

ナポレオンの没落後ドイツの知識階級及び學生の間に統一ドイツの建設の運動が起つたが、神聖同盟の大彈壓を受けて屈折するのみであつた。それ以後のドイツは、上に專制的官僚的政府を載き、下では凶作と饑饉に苦しむのみであつた。一八三〇年のフランスの七月革命の影響を受けてドイツにも諸處に暴動が起つたが、結局若干の憲法上の讓歩を得て結末した。併しこの間に漸次生長した市民階級は封建的な制度に反抗して自由主義運動、國民運動として現れた。教會的獨斷の代りに自由宗教的思惟を、哲學的思辨の代りに自然科學的研究を、警察的な統治の代りに經濟的振興と努力を、獨裁君主の代りに自由の憲法を、小諸侯の分裂の代りに國民的統一を、これが三〇年以後のドイツ市民階級の叫びであつた。大勢の赴くところは阻止し得るものでなく、市民的經濟活動の素地は漸次に築かれるに至つたのである。關稅同盟はその現れの一つである。

プロイセンは經濟的逼迫を救ふために、且國內の統一を計るために、一八一八年に國內關稅を統一する關稅法を施行した。その好結果を見て大勢は關稅同盟に赴き、ついに一八三四年にその成立を見るに至つた。これによつて國內の交通が自由になり、經濟の發達が促進されたのは謂ふまでもないことである。由來ドイツには良い國道や水道が乏しかつたが、發展する產業は迅速な交通を要求する。鐵道の計畫は既に一八二五年に起つたが、一八三五年に始めてニュルンベルクとフルトの間の五哩が敷設された。諸種の條件が備るにつれて遅ればせながらドイツの工業は發展した。二〇年代の初期にドイツ全體に僅か二臺しかなかつた蒸氣機關は四七年に至つてプロイセンだけでも一三九臺になつた。四〇年代の半ばにはプロイセンに工業企業が約七萬八千あり、五十萬人以上の労働者が働いてゐた。鐵道の延長も五〇年代には五千八百軒以上になつた。

産業發展の道をいそむドイツは多事な一八四八年にたどりつく。四六年の飢饉と翌年の工業恐慌はドイツを動搖せしめたが、殊にフランスの二月革命はドイツを三月革命に引入れた。抑へられたブルジアジーは憲法、出版や集會及び結社の自由、ドイツの統一等を要求した。彼

等は小ブルジアジーとプロレタリアの支持を得た。かくてウインの動亂につれてドイツの諸處にも暴動が起つた。併し間もなく反革命の勝利となり、三月以前の舊秩序が恢復された。だが今や封建的殘滓の部分的清掃が行はれ、この『未完成のブルジアジー革命』の後にドイツ資本主義は本格的な發展を見たのである。

大工業の發達と共に労働者の狀態も亦漸次に悪化した。既に一八一八年にライン地方の幼年工虐使が問題となつたのであるが、事情の漸次的悪化のために一八三九年にプロイセン政府は『工場における少年労働者の使用に關する規定』を發布した。四〇年代に貧困の極に達した労働者の暴動が起つたので、プロイセン政府は四五年に農業及び飼業の労働者の結社を嚴禁した。十九世紀の中葉においてドイツの労働階級の慘状は深刻化したが、併しその階級的自覺には未だ到達してゐない。労働者階級と資本家階級との意識的對立は、大工業の發展を前提するものである。産業革命の先進國たるイギリスでは一八三七年からのチャーチスト運動において、フランスでは七月革命において、殊に二月革命において、労働者は意識的にブルジアジーに對立したが、産業發達の遅れたドイツではそれがすつとおくれてゐる。既に一八四三年の『ヘ

『ゲル法律哲學批判序説』でマルクスはプロレタリアートの歴史的使命を宣揚し、四〇年以後ワイトリンク、ヘッス、グリュン等の社會主義者が活動してゐたが、ドイツ勞働者の階級的活動は三月革命以後にやつとスタートがきられたのである。

要するに十九世紀中葉のドイツにおいてプロレタリアートは擡頭し始めたが、當時の中心問題はなほ封建階級と市民階級の對立であつた。英佛諸國に活躍するマルクス、エンゲルスは當時においてもプロレタリアートの歴史的使命を明かに認識し得たが、終生ベルリンに蟄居したスチルナーにとつては、市民社會の若干の問題やルンベン・プロレタリアートのみが彼の視野に入り、封建的殘存物に對する小ブルジョア的鬭争が依然として彼の重大な事業であつたのである。一八四四年に出版された彼の『唯一者とその所有』がこのやうな環境に育まれたことを知る時、我等は彼のイデオロギー論をよりよく理解することが出来る。

(1) マルクス「ヘーゲル法律哲學批判序説」マルクス＝エンゲルス全集、第一卷、四四五、四四二。

二、ドイツの觀念形態

ドイツの市民階級の發達を概観した後我等は更に進んでそのイデオロギーの發展について見やう。

マルクスとエンゲルスは彼等の『ドイツ・イデオロギー』において、ドイツ哲學、ドイツ的イデオロギーを英佛のイデオロギーに對照せしめてその觀念論的非實踐的性格を曝露し、且その原因を明かにした。凡ゆる歴史の理解において第一に歴史の地上的な土臺をその全き意味において且それの全き擴りにおいて觀察し、それを正當に評價し承認することの如何に必要であるかは、彼等がその著書で示したところである。併し『このことをばドイツ人は、周知の如く、決してなきなかつた。それだから彼等は嘗て歴史にとつての地上的、土臺を有たず、そしてその結果嘗て歴史家といふものを作たなかつた。フランス人及びイギリス人は、たとひ彼等はこの事實と所謂歴史との關聯を單に極めて一面的に把握したに過ぎなかつたにせよ——殊に彼

等が政治的イデオロギーに囚はれてゐた間はさうであった——しかも彼等はともかく、市民社会の、商業及び産業の歴史を最初に書いたことによつて、歴史敍述に一つの唯物論的土臺を與へる最初の試みをなしたのである。』⁽¹⁾ 然らばドイツのこの觀念論的非實踐的性格は如何なる原因によるものであるか。『ドイツ人には、それに必要な理解力や資料が缺けてゐるばかりでなく、また「感性的確知」が缺けており、且ひとはラインの彼岸では、そこではなんらの歴史ももはや進行してゐないが故に、これらの事物について何等の経験をなし得なかつたからである。』⁽²⁾ 我等は更にこのドイツ的イデオロギーを歴史的に追跡して見よう。

既に述べた諸種の事情によつてドイツの産業の發達は英佛に比べて著しく遅れ、ドイツのブルジアジーは英佛のそれに比べて著しく無力であつた。彼等は政治に活動の領域を見出す事が出来なかつた。觀念界においては小ブルジアジーが慎しやかな活動をして十八世紀のドイツ文學と哲學の花を咲かせた。併しこの觀念界における百花揺亂は遂にその世俗的地盤を見失ひ、更に進んでは觀念の世界支配を宣言するに至つたのである。十九世紀の後半の産業ブルジアジーがそれを克服するに至るまでドイツ觀念論は幾多の徒花を咲かした。カントがその代表

的なものである。

『前世紀末におけるドイツの狀態は、カントの實踐理性批判のなかに完全に反映されてゐる。フランス・ブルジョアジーは歴史上未曾有の大革命によつて支配者の地位に躍進し、またヨーロッパ大陸を征服し、政治的に既に解放されたイギリス・ブルジアジーは産業革命をなしとげ、インドを政治的に、其他の全世界を商業的に征服したのに反して、無力なるドイツ市民に齎されたのは唯「善良なる意志」のみにすぎなかつた。』⁽³⁾ 「實際の階級關係に基づくフランスの自由主義がドイツにおいてとつた特徴的形態を我等は再びカントにおいて見出す。カント並びに彼をその曲飾的代辯者となしてゐたドイツの市民達は、かくの如きブルジアジーの理論的思想が物質的利害關係及び物質的生産關係によつて制約され規定される意志に基いてゐることを洞察しなかつた。だからカントは、この理論的表現をそれが云ひ表してゐる利害關係から引き離してしまひ、フランス・ブルジアジーの意志を物質的に動機付けた諸規定を「自由意志」の、即向自的の意志の、人間的意志の純粹の自己規定となし、かくてそれを純粹のイデオロギーの概念的規定及び道德的命令に轉化した。』⁽⁴⁾ 『それが何等の結果をも齎さない場合でも、カント

はこの單なる「善良なる意志」に満足した。そしてこの善良なる意志の實現、それと個人の慾望及び衝動との調和を、彼岸の世界に定立した。カントのこの善良なる意志は、こせ／＼した利害關係のために階級的共同的國民的利害關係に發展することが出來ず、従つて絶えず總ての他國民のブルジョアから擷取されて來たドイツ市民の無力、沈滯、困窮に、完全に對應してゐる。このこせこせした局部的利害關係に、一方ではドイツ市民の實際の局部的及び地方的の狹量さが照應し、他方ではその世界主義的高慢が照應した。〔⁵〕

ドイツ觀念論がブロイセン國家のヘーゲルにおいて新しい形相を展開することは、當然期待されるところである。先進諸國との競爭において今やドイツの世界主義は國民主義に轉化した。併しその觀念論的傳統は依然保持されてゐる。否、それは發展され、完成されて精神の世界支配を宣言するに至つたのである。ヘーゲル哲學は『數十年間續いた一の凱旋行列』であつた。『一八三〇年から一八四〇年の間といふものは、「ヘーゲル風」が獨占的にはびこつて、ヘーゲル反對者すら多かれ少なかれこれに感染したのである。まさにこの時代にはヘーゲル思想は、意識的に或は無意識的に、ありとあらゆる科學に侵入し、謂はゆる「教養ある意識」の思想の

糧となつてゐる通俗書や日刊新聞のなかにも充滿した。』〔⁶〕 だが、「満つればかくる」とヘーゲルはその辯證法で我等に教へた。つひに我等はヘーゲル哲學の辯證法に遭遇するのである。

『古典哲學においてドイツ市民階級はその經過と足跡を若干世界史の記錄に残した。その物質的勢力を發展せしめることに彼等が到達するや否や、この記錄は餘分の頁となつて了つた。工場の煙突の煙の柱に工業がその旗を自由にはためかすにつれて、哲學の雲の如き形象はいよいよ急速に崩潰して行つた』のである。〔⁷〕 激化する外國との競爭と流通經濟の發展と共にドイツの分散してゐる地方的利害關係は一つの確乎たる共同關係に結合するに至つた。一八三〇年のフランスの七月革命の餘響を受けて、ドイツにおいても、物質的關心が次第に高まり、商人がおひおひ民衆の上に立つに至つた。土地貴族に對して哲學とブルジョアジーは共同戰線を張り、こゝにヘーゲル哲學の分裂が行はれ、青年ヘーゲル派の花々しい活躍となつたのである。

ヘーゲル哲學の分裂の誘因となつたのは、一八三五年のシュトラウスの『イエス傳』であつた。これはローマン主義に對するブルジョアジーのための鬭争である。當時において政治は荊棘だらけの原野だったので勢ひ主要鬭争は宗教に向けられた。尤も四〇年以後宗教に對する鬭

争は間接的には政治闘争となつたのであるが。シュトラウスを起點として、バウア、フライエル、バッハ、スチュルナア等の哲學者の大混戦が開始された。併し「一八四八年の革命は、フライエル、バッハがヘーゲルを片附けたと同じ無體なやり方で、哲學全體を總括的に片附けて了つた。」そして「教養あるドイツは、理論に告別の辭を與へて實踐の領土に行つた」のである。⁽³⁾

マルクス＝エンゲルスはその『ドイツ・イデオロギー』で青年ヘーゲル派の他に真正社會主義を批判した。真正社會主義は青年ヘーゲル派の兄弟であつた。四〇年代におけるドイツの產業の發達と共にプロレタリアートとブルジョアジーの利害の衝突が起つたが、一部のドイツ人はこれを、英佛の社會主義にヘーゲル的論理學の衣を着けたものによつて處理しようとした。彼等は『緊張せるドイツの理論』、即ち『真正社會主義』、『哲學的社會主義』を提出して、英佛人の無益な活動や淺薄な社會理論を嘲笑した。併し要するに彼等は若干の哲學的範疇を羅列したのみで、社會の具體的事實、社會問題研究の眞の基礎を等閑に附した無氣力のイデオロギーにすぎない。

ドイツ古典哲學に反抗して觀念から現實に一步步みよつた青年ヘーゲル派と真正社會主義

は、依然としてドイツ觀念論であり、ドイツ的イデオロギーであつた。マルクス、エンゲルスが出来るに及んで、市民社會に對する深い洞察に基いてこのドイツ的イデオロギーの非實踐的性恪を曝露し、これを克服した。四八年の革命は凡ゆる幽玄な哲學理論を掃蕩したが、廢虛から唯物史觀の花が咲き、新しい歴史の展開の活力が育まれたのである。

一八四四年に出版されたスチュルナアの著書において批判された當時の觀念界の主要潮流は、自由主義、社會主義及び青年ヘーゲル派の哲學であつた。一八四五五年から四六年にかけて書かれたマルクス＝エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』においても、自由主義以外の二つの潮流が批判されてゐる。これらの事實によつて我等は、十九世紀中葉のドイツの觀念界の主潮が、自由主義、社會主義及び青年ヘーゲル派の哲學であることを推測することが出来る。ヘーゲル及び青年ヘーゲル派については既に述べたから以下他の二つについて見よう。

ドイツの自由主義は、政治的自由主義はフランスから、經濟的自由主義は當時英領であつたハノウバアのダーリングデン大學を通して輸入されたものである。スマスの『國富論』は翻譯さ

二、ドイツの觀念形態

れ、市民階級の生長と共に普及し、政治家のうちにもその支持者を得るに至つた。中葉における産業の發展と共に自由主義は殷然たる一方の勢力を保つに至つたのである。

スチルナーの批判に上つた社會主義は、フランスの空想社會主義とマルクス、エンゲルス以前のドイツ社會主義であつた。フランス社會主義の内、バーフ、フーリエ、ブルードン、ルイ・ブランが論及され、ドイツ社會主義では、フランス社會主義の社會思想を勞働者的實踐に結びつけたワイトリンク及びベッカアと、フランス社會主義をドイツ哲學的に製造しなほしたベッスの真正社會主義が、問題にされた。

このやうな觀念的狀勢の下に生活したスチルナーは如何なる人であつたか。次にそれについて見るにしよう。

- (1) マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』三木清譯、五七頁。
(2) 同前、五九頁。
(3) Marx=Engels: Die deutsche Ideologie. C. III. Sankt Max. im „Karl Marx, der historische Materialismus“ her. von S. Landsberg u. J. P. Mayer. II. Bd. S. 176—177. マルクス＝エンゲルス全集、
(7) Meiring: Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, I. Bd. S. 125.
(8) 『トマイヒルベルク論』四四、九八頁。

第七卷 111、131頁。譯文は大體これによつた。

(4) A. a. O. S. 179. 同前、131頁。

(5) A. a. O. S. 177. 同前、131頁。

(6) ハンダルス『トマイヒルベルク論』佐野文夫譯、三八一三九頁。

(7) Meiring: Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, I. Bd. S. 125.

(8) 『トマイヒルベルク論』四四、九八頁。

III 彼の著作的活動

マックス・スチルナー (Max Stirner) は一八〇六年一〇月二十五日バイエルンのバイロイトに生れた。本名はヨハン・カスパー・シムット (Johann Caspar Schmidt) で、マックス・スチルナーは高い額又は大きい額を意味し、仲間が彼の顔の印象から彼に付けた綽名であるが、彼はそれを自分のベンネームとした。父は樂器の職人で、彼の生れた翌年に死んだので、母は彼をつれて

三、彼の著作的活動

薬剤師のところへ再嫁した（一八〇九）。十三歳の時（一八一九）にギムナージュに入り、二十歳（一八二六）に卒業してベルリン大學に入った。一八二八年にベルリン大學を退學してエーランゲン大學に入り、二九年にドイツ各地を旅行して十一月にケーニヒスベルク大學に入った。三二年に又ベルリン大學に入り、三四年に再び退學した。二十歳から二十八歳迄（一八二六—三四）の間轉々として大學の巡禮をしたのである。大學では哲學と神學と歴史を研究し、ヘーゲル、シュライエルマッヘル、リッタア等の講義を聴いた。一八三四四年に教員検定の國家試験を受けたが、精神病の母の世話や自身の病氣のために成績が思はしくなく、やつと假免状を得ることが出来た。三五年から一ヶ年半レアールショーレで見習教員となり、就職運動をしたが成功しなかつた。三七年にかねて關係のあつた下宿の娘と結婚したが、翌年妻は早産のために死んだ。三九年グロビウス夫人の經營する女學校の教師となり、彼の主著の出版の時迄奉職した。四〇年頃からベルリンの自由人の仲間に入り、四三年に自由人のなかの『新しい女』デーンハルト嬢と結婚した。四四年のクリスマスの前に出た彼の『唯一者とその所有』は彼の文名を高からしめた。⁽²⁾ 當局は初めこの危険な本の發賣を禁止したが、こんな無茶なものはかへであつた。

スチルナの著書は次の通りである。

Der Einzige und sein Eigentum. 1844.
Die Geschichte der Reaktion. II Bd. 1852.
I. Die Vorfäüer der Reaktion.
II. Die Moderne Reaktion.

Die Nationalökonomie der Franzosen und Engländer. 1845—47.

III. 彼の著作的活動

つて害にならないといつて解禁した。その後彼は妻の持參金で牛乳屋を開いたが失敗し、やがてデーンハルトとも別れた（四六年）、「唯一者」の出版の時が彼のクライマックスで、それ以後一三の經濟書の翻譯をしたり自分の著書の批判に対する答辯を書いたりしたが、一八四八年の三月革命の反動期以後は全く忘られて丁つた。晩年は赤貧洗ふが如しで、一八五三年の如きは借金のことで一度まで留置された。その結果がまた悲劇的で、一八五六年六月二十五日毒虫にさまれてベルリンの下宿の一室でなくなつた。時に年五十歳、その生涯は徹頭徹尾陰惨なものであつた。

第五章 ベルナード・オロギー編

1144

I—IV Bd. Ausführliches Lehrbuch der praktischen politischen Ökonomie, von J. B. Say, Deutsch mit Anmerkungen von M. Stirner.

V—VIII Bd. Untersuchungen über das Wesen und die Ursachen des Nationalreichtums, von A. Smith, Deutsch mit Anmerkungen von M. Stirner.

Max Stirners kleinere Schriften und seine Entgegnungen auf die Kritik seines Werkes: „Der Einzige und sein Eigentum“ Aus den Jahren 1842—47, hrg. von Mackay, 1898.

スチルナの名を聞く時、我等は無政府主義を思ひ浮ぐ。ハングルスは彼を『無政府主義の豫言者』と謂ひ、『バクーリンが彼とアルードンとを擧ぎませて捏ね上げたものを無政府主義と命名した』と謂つた。無政府主義者としての彼は、集產主義的或は共産主義的無政府主義ではなくして個人主義的無政府主義に屬し、經濟的社會的な考察よりも哲學的思辨をこととした。その觀念史的傳統についてとは、マルクスは彼を青年ヘーゲル派の一人として擧げてゐる。誠に彼はドイツ觀念論のヒュンゴーネンである。ドイツ觀念論における青年ヘーゲル派の地位

については既に前項で指摘したから、以下はこの青年ヘーゲル派の一般的特徴とその主な代表者の各々の特色について見ることにしよう。

青年ヘーゲル派の一般的特徴は、マルクス＝ヒンゲルスがその『ドイツ・イデオロギー』や明かに示してゐる。『ドイツの哲學的批判家たちは一人残らず、觀念、表象、概念がこれまで現實の人間、世界を支配しまた規定して來たところを、現實の世界が觀念的世界の一の生産物であるところを、主張してゐる。』彼等の間に若干の相異はあるが併し『彼等の批判的な思惟活動が現存するものの没落を齎すに相違ないとしむ信仰におよて相一致してゐる。』⁽⁴⁾『ヘーゲルの體系に従へば、觀念、思想、概念が人間の現實の生活を、彼等の物質的體界等の實在的な諸關係を生産し規定し支配した。彼等の叛逆的な弟子達はこの點を彼から受取つてゐる。』⁽⁵⁾而してこの青年ヘーゲル派の哲學の核心であるところの罪のない子供らしい空想は、次の點に存する。『人間は從來常に、自分自身に關して、即ち、自分が何であるか若くは何であるべきかについて、間違つた觀念を懷いて來た。神とか規範人とか等々についての彼等の觀念に従つて、彼等は彼等の諸關係を律して來た。彼等の頭腦から生れ出たものは大きくなつて

彼等の手に負へなくなつた。彼等の創造物の前に、創造者たる彼等は、身を屈して來た。我等は彼等を、彼等がその軀のもとで萎縮せるところの幻想、觀念、獨斷、空想的迷妄から解放しよう。我等は思想のこのやうな支配に對して叛逆しよう』⁽⁵⁾ と彼等は叫ぶのである。しかもこの哲學は『ドイツにおいて、單に一般公衆から驚愕と畏敬の念を以て迎へられてゐるばかりでなく、また哲學的英雄たち自身によつて、世界を顛覆する危險性を有ち犯罪的な無遠慮をおかすものだといふ仰山な意識を以てふれ出されてゐるのである。』⁽⁶⁾ 青年ヘーゲル派の特徴は舊ヘーゲル派と對照される時に一層明瞭になる。シュトラッスからスチルナに至るドイツの全哲學的批判は、宗教的諸表象の批判に局限されてゐる。まさにこの點彼等の舊ヘーゲル派に対する特徴がある。『舊ヘーゲル派の人々は凡てのものを、それがヘーゲルの或はひとつの論理的範疇に還元されるや否や、理解した。青年ヘーゲル派の人々は凡てのものを、それを宗教的諸表象とすりかへるか若くはそれを神學的であるとか宣言することによつて、批判した。青年ヘーゲル派の人々も、現存する世界における宗教の、概念の、普遍的なものの支配に對する信仰においては、舊ヘーゲル派の人々と意見を同じくしてゐる。唯前者は、後者が正統であると

して服するところのこの支配を纂奪であるとして攻撃するといふだけの相違である。これらの青年ヘーゲル派の人々にあつて表象、思想、概念、一般に彼等によつて獨立のものにされた意識の諸生産物が人間の本來の桎梏であると見られること、あたかも舊ヘーゲル派の人々にあつてそれらのものが人間社會の眞の紐帶であるとされるのと軸をして、論ずるまでもなく、青年ヘーゲル派の人々はまた單に意識のこれらの諸幻想に對して闘争することだけが必要なのである。彼等の想像にしたがへば、人間の諸關係、その全體の行動營爲、その桎梏と制限は、人間の意識の生産物であるからして、青年ヘーゲル派の人々は、首尾一貫した仕方で、人間の現在の意識を人間的な批判的な或ひは利己的な意識と取り替へ、それによつて人間の制限を排除すべきである、といふ道徳的要請を人間に課してゐるのである。』⁽⁷⁾

一八四〇年頃からベルリンのある酒場で、四二年頃から主にヒッベルの酒場で、青年ヘーゲル派の一團の人が集つた。これらが有名なベルリンの自由人である。その主な人は、Bauer兄弟、Ludwig Buhl, Eduard Meyen, Adorf Rutenberg, Hermann Maron, Fr. Salb, で、一時はJulius Faucher, Fr. Köppen, Fr. Engels もこれに加つた。彼等は多く二十から三十迄の若い

人で、政治的社會的不滿を懷き、神的並に人的の一切の神聖なもの否定者であつた。わがスチルナアもその常連の一人なのであつた。この自由人の不羈奔放な生活は彼の自我主義者の組合のモデルとなつたもので、「唯一者」の誕生に與つて重要な役割を演じたものである。

スチルナアがその一人であるところの青年へーベル派の一般的特徴は上來述べた通りであるが、我等は更にその各々の特色について見よう。

最初の爆弾を投じたシュトラウス（一八三五年『イエス傳』）は、ラッハマンの方法を以てキリスト教に臨み、福音書をミトロギーに解消した。ブルノー・バウアはシュトラウスを批判し、ミトロギーの代りに人間の自己意識を強調した。一人ともに各々へーベルの絶對理念的一面を、即ちシュトラウスは實體、人間から引き離された自然を、バウアは自己意識、自然から引き離された人間を、徹底的に逐行しつゝヘーベルを飛び越えて行つた。彼等の論争は要するにヘーベル哲學の内における論争に他ならない。これに對してフォイエルバッハは觀念論を顛倒して唯物論に至り、神を人間に、現實的人間に解消したのである。

彼等の後からスチルナアが登場した。彼にとつてはバウアの『初めて發見された』といふ人

間も、フォイエルバッハにとつて最高の存在であるところの人間も、共に觀念であり幽靈であつて、彼はこれを窮極的な實在であるところの唯一者に解消したのである。フォイエルバッハは外部の世界から神を追ひ出したが、スチルナアは人間の内部にひそむ神即ち固定觀念をも追ひ出さうとするのである。等しく觀念の革命を行はうとした彼等の各々の特徴は、マルクスの次の言葉に要約される。即ちフォイエルバッハは、「我等は彼等に、これらの空想をば人間の本質に相應せる思想と取り換へることを教へよう」といひ、ブルノー・バウアは、「それらの空想に對して批判的態度をとることを教へよう」とし、スチルナアは、「それらの空想をば脳裡から追ひ拂ふことを教へよう」とするのである。⁽⁵⁾

一八四四年に出版された『唯一者とその所有』は、一夜にして著者の文名を高からしめた。それは當時の思想界に強いショクを與へ、有名な唯一者の顔を見ようとしてわざわざヒッベルの酒場をおとづれたものもあつた位である。諸家のそれに對する批評によつて我等はその評判を伺ふことが出来る。ルーゲはその母への手紙に次のやうに書いた。『スチルナアの著書はすばら

い現象です。多くの部分は全く巨匠の風格を備へ、全篇これ解放の精神にみなぎつてゐます。これはドイツにおける最初の翻譯に價する著作で、そしてもし再び彼自身の狂氣即ち唯一者の狂氣が彼を妨げなかつたら、最初の舊弊ならない、妨げられない人間が現れたでせう。』¹⁹ フォイエルバッハは該書の出版後間もなく（十二月十三日）その兄弟に宛て、次のやうに書いた。

『唯一者とその所有』はこの上もなく卓越した天才的な著作であり、そして自我主義の眞理を、——尤も的をはずれて一面的に非眞實的に定説してゐるのであるが——それ自身に含んでゐる。人間學に對する、即ち私に對する彼の駁論は、純然たる無理解と淺慮とに基いてゐる。本質において彼は私に對して的是はずれであるといふ一點を除いては、私は彼に賛同する。とは謂へ、彼は私の知る限りでは最も天才的で最も自由な著作家である。』²⁰ 菅て自由人の仲間の一人であつたエンゲルスは、スチルナーの著書を讀んだ後にマルクスへの手紙において、ベルリン人が如何に抽象的思辯に累されてゐるかを慨嘆しながらも、スチルナーを以つて『明かに自由人中最も才能があり、獨自性を有ち且勉強家だ』としてゐる²¹ 彼は唯一者を批判しながらもそれに共鳴するところがあつた。』²² だが原理のうち本當である點は、我等もやはり採用しなけれ

ばならない。その原理のうちで、我等はある事物のために何事かを我等がなし得る前に、まづその事物を我等自身の事物、利己的な事物としなければならぬといふ點——従つて、我等はこの意味において、何等かの物質的な希望を描いて間はずとするも、共産主義者たるもの利己心からであり、單なる個人ではなくて人間たらんと欲するのも利己心からであるといふことは、確に本當である。或ひは私の考へを別の言葉で表現すれば、スチルナーは彼がフォイエルバッハの「人間」、少くともキリスト教の本質のそれを非難する時、正しい。フォイエルバッハの「人間」は神から演繹されてゐる。フォイエルバッハは神から「人間」に來た。だから「人間」はまた確かに抽象的神學的後光を戴かされてゐる。』²³ マルクスへの手紙のこの一節は彼のスチルナーに對する共鳴を表すものである。併しマルクスはより批判的であった。彼はエンゲルスの唯一者に對する共鳴を批評した。その消息は、一八四五年一月二十日のエンゲルスの手紙で伺ふことが出来る。『……スチルナーに關しては僕は全然君と同感である。僕が君にお便りした時分、僕はまだ該書の直接の影響に虜れすぎてゐた。僕は該書を打遣つておいて猶よく熟考し得てから後、君が見出したと同じことを見出した。』²⁴ それから暫く後に執筆された彼等の『ドイツ・

「イデオロギー」において、彼等はスチルナーの著書を逐次的に検討してその誤謬（歴史的事実に對する無理解など）を指摘し、彼をその仲間における最も無知なものだとまで極言したのである。

「唯一者」の出た後これに對して種々の批評があつた。その中でもフォイエルバッハは自分の著書の批判に對する答辯をし、スツーリガは自由的批判の立場から駁論し、ヘッスは社會主義擁護のために辯じた。⁽¹⁾ これに對してスチルナーは答辯をした。⁽²⁾ その他にも彼の著書を批判したもののが多數ある。⁽³⁾ 諸種の批評のうちマルクス＝エンゲルスの公刊されなかつた「ドイツ・イデオロギー」が最も重要なものであることは謂ふまでもないところである。⁽⁴⁾

我等は十九世紀前半のドイツ人としてのスチルナーを尋ね、ドイツ觀念論における彼の地位、青年ヘーゲル派における彼の特殊性、彼の著書並にその世評について見て來た。この歴史的社會的背景に照して見る時、彼のイデオロギー論の輪廓の大半は既に明かになつたと思ふ。次に進んでそのイデオロギー論に入らう。

(1) 本書の出版年代は普通一八四五五年になつてゐる。だが、實際は一八四五年的年號がついて一八四年の十一月上旬に出版されたものである。Schultheiss, H.: Stirner, Grundlagen zum Verhältnis des

"Der Einzige und sein Eigentum", S. 9.

(2) 「フォイエルバッハ論」四一頁、七四頁。

(3) 「ドイツ・イデオロギー」三八頁。

(4) 同前、三九頁。

(5) 同前、三六頁。

(6) 同前、三六一三七頁。

(7) 同前、四四頁。

(8) 同前、三六頁。

(9) Strugarescu, G.: Max Stirner, Der Einzige und sein Eigentum, S. 46.

(10) Schulheiss, H.: a. a. O. S. 16—17.

(11) 一八四四年一月一九日附のモンカルムからマルクスへの手紙。マルクス＝エケルス全集、第十七卷、一四頁。

- (12) 同前、一三頁。
- (13) マルクス＝ハインケルス全集、第十七卷、一六頁。
- (14) Feuerbach: Über das Wesen des Christentums in Beziehung auf den Einzigen und sein Eigentum. Szetige: Der Einzigen und sein Eigentum. Hefl: Die letzten Philosophen.
- (15) Recensenten Stirner, Entgegning an Feuerbach, Szetige und Hess.
- (16) Engert, H: Das historische Denken Max Stirners, S. 64—65, Strugarescu, G: a. a. O. S. 45—52. Schuhleiss, H: a. a. O. S. 9—38.
- (17) Die deutsche Ideologie, eine Kritik der neuesten deutschen Philosophie in ihren Repräsentanten Feuerbach, Bruno Bauer und Stirner sowie des deutschen Sozialismus in seinen verschiedenen Proportionen.

四、彼の思想體系

『ドイツにとつて宗教の批判は本質において終結を告げてゐる。而して宗教の批判こそは一切

の批判の前提をなすものである』とマルクスは一八四四年に記した。⁽¹²⁾ そこから、即ちフェイエルバッハから出發して彼は人間批判に進み、更に社會批判に及んだ。我がスチュルナウも同じところから出發してゐる。

ベーゲルの壯麗な體系において完成された神學的哲學は、フェイエルバッハの俎上に上り、今や『神性の主體は理性、だが理性の主體は人間である』ことが曝露された。神が人間を創つたのではなくて人間が神を創つたのである『人間は人間にとつて最高の存在』なのである。だがこの新に發見された人間とは如何なるものであるか、問題はこゝに存する。『近代の入口には「神人」が立つてゐる。その出口では神人の中の神だけが發散するだらうか。また神人は、彼の中の神が死にさへすれば實際に死ぬことが出來ようか、人はこの問題について考へなかつた。そして啓蒙の仕事、神の征服が現代においてその凱歌を奏したとき、もはや事は落着したと考へた。人は、人間が今——「上にゐます唯一の神」となるために神を殺したのだ、とは氣づかなかつた。我等の外なる彼岸はたしかに一掃された。そして啓蒙家の偉大なる計畫は完成された。併しながら、我等の内なる彼岸が新しい天國になつて、新に繰返される天の襲撃に我等を

召集する。神は位を譲つた。併しそれは我等ではなく、寧ろ——人間にである。神人の中の神ばかりでなく、その人間もまた死なない限り、諸君はどうして、神人の死を信ずることが出来やうか』⁽⁵⁾とスチルナアは問題を提出した。

神人の後に發見された『人間』とは如何なるものであるか。君、僕、彼、彼女を離れて二體種族としての『人間』といふものは何處に存在するか。『人間』とは要するに一の概念であり、幽靈であるにすぎない。自我的分裂、即ち概念的な人間の本質が現實的な肉體的なものから分離して一つの彼岸的なもの、一つの本質となつて自我に君臨したものに他ならない。それは過去における超人間的な神に對する人間的な神であり、人間的な宗教であり、フォイエルバッハの理説はキリスト教の最後の變態に他ならない。自我主義者は、この抽象的な人間の真相を曝露し、その神聖性妖怪性を排撃して、これを究局的な唯一般的な實在、即ち自我に解消するのである。

凡ゆるもの現實的地盤は自我である。唯一般的な存在は自我、即ち唯一者である。それは一切の觀念を產出するものであり、一切の思惟の前提であり、萬物の尺度にして審判者であり、

一切萬事である。元來人間は生れ附きの利己主義者である。萬人は萬人と闘争するやうに運命附けられてゐる。『人間は、この世の光を見たその瞬間から、彼が彼の凡ゆるものと一緒に無茶苦茶に抛りこまれてゐるその混沌の中から、彼自身を發見し、彼自身を獲得しようと努力する。』⁽⁶⁾『銘々が自分自身を大事にすると共に、絶えず他と衝突するために、自己主張の闘争が避けがたくなる。』⁽⁷⁾勝か負か、賽の目の二つの内に闘争の運命は動搖する。勝つたものは主人となり、負けたものは臣下になる。乍併兩者は依然として敵であり、そして常に相手の隙を窺つてゐる。人間にとって利己が總ての總てである。

利己的な自我の性質に更に立入つて見よう。『私の出發點である「自我」は思想でもなく、思惟過程でもない。』それは『神でもなく、人間でもなく、最高の本質でもなく、私の本質でもない。』それは私であり、君であり、我等であり、君等である。第一にそれは肉體的である。即ち、個々の人體に具體化されたものである。人間の自己疎隔化によつて人間の理念を『眞の人間』とし、現實の人間を『非人間』として分裂せしめたが、スチルナアの自我はこの兩者を統一したところの『肉體を有つ精神』である。それは『本當の現實な人間であり、從つて完全な人間』

である。次にこの現実の自我は「自分自身を解消する自我、恒存せざる自我、有限的な自我」であり、「無常なる自我」である。更に彼の自我は唯一的である。それは「比較を絶した唯一者」である。即ち「多くの私等の中の一つの私ではなくて、唯一人の私である。私は唯一的である。」元來自我は「創造的無、それから私自身が創造者として一切を創造するところの無」なのである。思惟され得ず、知解され得ず、比較され得ず、規定され得ず、言葉で表現され得ない。「唯一者は單に名前なのだから、何をも立言しない。唯、君は君であつて君以外の他人でないといふこと、君は唯一的の君、即ち君自身なのだといふことを謂ふに止る。」「私は唯一だ。だからまた、私の慾望も、私の行爲も、つまり私に附隨する一切が唯一だ。そして單にこの唯一の私としてのみ私は私を活動させ發展させる。私は人間として發展するのでなく、また人間を發展させるのでもなく、私は私として——私を發展させるのだ。これが唯一者の意氣である。」⁽⁵⁾要するに「私にとつて私以上の何者もない。」「私は私にとつて一切萬事であり、そして私は一切事を私のためにするのだ。」⁽⁶⁾これがスチュルナの人の學であり、疑ふべからざる眞理であり、彼の理論の大前提である。

この眞理は併し必ずしも世人一般に了解されてゐる譯ではない。否、世人は寧ろ汚穢なる利己主義に驕り、利他、公共への奉仕を強調し禮讃する。ところがこれは表面上のことにすぎない。強者は利他や奉仕を名目にして私利を圖り、無知なものは利他や奉仕をすると信じて自我主義を實行する。事實において利他や公共への奉仕は常に名目であり手段であり、人は常に自己自身の利益のために行動してゐる。人々は利他を君に勧める。『そして人は誰のために君に向つて非利己な自己否定を勧めるか、又しても君の利益のためである。つまり君は非利己によつて君の「眞の利益」を得るのである。』⁽⁷⁾『諸君が最も多く自我主義者であるやうな場合にも、諸君は「自我主義者」なる言葉に——嫌感を侮蔑とを與へる。併し「諸君の行爲が總て白白はされない、秘密の、蔽ひ隠された自我主義者である。」「無意識の自我主義者である。』⁽⁸⁾『諸君はなほこの數千年間を通じて依然として、自我主義者であつた。但し睡れる、自己自身を欺ける、狂氣の自我主義者であつた。』⁽⁹⁾

これは明かに人間の自己欺瞞である。我等はその原因を究めなければならない。『數千年の文化は、諸君が何であるかを曖昧にし、諸君をして、諸君は利己主義者ではなくして寧ろ理想家

(善人)たるべく召されてゐる、と信じさせたのである。』⁽¹⁰⁾ 元來人間の心的內容には二つの契機がある。一つは他のものによつて私の裡に誘發されたもので、他は他のものによつて私に注入されたものである。前者は自我主義的なものであるが、後者は教養などによつて私の裡に注入され、つひに私を征服するに至るものである。神、不死、自由、人間性等々がそれである。つまり人間の創造物が主人になつて了ふのである。これが數千年來の事實であつた。だがこゝに新しい福音を唱へる唯一者が歴史を廻轉せしめるために登場する。彼はこれらの自我の創造物の真相を曝露し、解消する。そして、『諸君自身を求め給へ。エゴイストになり給へ。諸君は各自全能の自我になり給へ。或はもつと明白にいへば、諸君は、諸君が實際それであるところのものをのみ、唯それをのみを承認し給へ。そして諸君があるよりほかの何物かであらうとする諸君の偽善的努力、諸君の愚かな病癖を棄て給へ』⁽¹¹⁾ と教へるのが、自我主義者の使命なのである。

上來我等は主として『自我』について見て來た。以下はその創造物たる諸觀念形態について

見よう。

究極的實在は自我のみであつて、その他の總てのものは皆自我の創造物である。自我の創造物でありながら自我より遊離して獨立化し、つひに自我に君臨するこれらのは「固定觀念」(fixe Idee) であり、「妖靈」(Geister) であり、「妖怪」(Spuk) であり、「化物」(Gespenster) であり、「精神 (Geist) の世界」であり、「神聖なもの」である。まづ第一に「善の事、それから神の事、人類の事、眞理の、自由の、人道の、正義の事、更に我國民の、我王君の、我祖國の事。最後には精神の事まで、そしてその他無數の事」がそれである。⁽¹²⁾ 法、法律、名譽、サルタン、結婚、公益、秩序等々も亦さうである。

これらの諸觀念形態と自我とは如何なる關係に立つものであるか。自我は一切事に對する尺度にして審判者であり眞理の基準であるから「何物も獨自の又は絶對の價値を附せられるべきではなく、その價値は私の中に求められなければならない。」利己主義者は、精神のために生きてその固有の利益を犠牲にするのではなくして、その逆である。凡ゆる科學は自我に君臨すべきものでなくて自我によつて自由に驅使さるべきものであり、自我の世界享樂及び自己享樂

のための力の表出でなければならない。それは自己目的でなくて、自我のための一手段でなければならない。『學問は利用されるためでなかつたら、そもそも何のために在るか。』⁽¹⁵⁾ 自我主義者には何等の理想も天職もない。『如何なる思想も神聖ではない。如何なる感情も神聖ではない。如何なる信仰も神聖ではない。それらは凡て譲渡し得べきもの、譲渡し得るもの、所有であり、そして、私によつて創造されもするし又剣滅されもあるものである。』⁽¹⁶⁾ 如何なる友愛も決して神聖なものではない。『君において私の一生を幸福にする賜物を發見するから私は君を伴侶に選ぶ。……私にとつて君は君が私の利益のためにあるところのもの、即ち私の對象であり、それ故私の所有であるに過ぎない。』⁽¹⁷⁾

過去の歴史を支配したところの神の正體はフォイエルバッハによつて曝露され、人間に解消されたが、フォイエルバッハの人間も亦妖魔であり化物であることは、前に述べたところである。この他に又化物は澤山ある。政治的自由主義者の渴仰する國家もその一つである。『人の國家と呼ぶところのものは、従屬と戀着との縁物であり編物である。……國家は従屬の秩序である。』⁽¹⁸⁾ この人と人との直接的支配關係が支配及び従属の秩序として客觀化せられ、更にこれに神祕的も等しく神聖なものに他ならない。

な人格又は神格が賦與せられる。他者として自我に君臨し、第三者として諸自我の直接關係に入れるところの、しかも自我の腦裡以外の現實世界には存在しないところの魔力ある人格が、國家なのである。それ故に『國家は神聖であり、私即ち個人に對抗するものであり、それは「眞の人間」であり、妖魔であり妖怪である。』⁽¹⁹⁾ 國家に關聯するところの國民、人民、法、法律も等しく神聖なものに他ならない。

更に社會について見るに、彼は人類の原始狀態は孤立的なものではなくて共存生活をしたことを承認してゐる。だが、社會は要するに多數人の集合で、それらを離れて別に一個の肉體を有つ社會といふものが在る譯ではない。社會生活の過程において觀念的なものが遊離して一つの人格となり神格となり、つひに個人の上に君臨するに至る。この神祕的な社會は要するに妖魔に他ならない。市民社會では經濟的な諸咒物が人々の生活を支配する。そこで社會主義は財産の社會化を主張し、個人をルンブにしようとする。だがこれは自我に對する略奪であり、妖魔の自我に對する冒瀆である。自我主義者は暴威を振ふ幽靈を解消して自我の所有物とし、社會の代りに自我主義者の結合をつくらなければならぬ。

この世界は化物の世界である。化物は永い間人間を蠶食した。だが今や救済者が出て人間をこの化物の支配から解放する時となつた。彼スチルナーは、これらの固定觀念、これらの妖靈の真相を看破して救濟法を呈示した。即ち觀念革命である。

人々は過去の永い歴史において妖靈に對して苦闘して來たが、悉く失敗した。人々は一人の暴君を倒した、だがその代りに人民といふ暴君を立てた。人々は神なる妖靈を追ひ出した、だがその代りに人間なる妖靈を引き入れてゐる。これはそもそも如何なる原因によるものであらうか、變革方法の不徹底のためである。人々は今までに多數の革命をして來た。だが革命は舊制度に新制度を代へ、舊主君に新主君を代へる中途半端なものである。『社會は、これを構成する人々が依然として舊の如くである限りは、新しくなることが出來ない。』⁽¹⁸⁾ 肝心なことは制度の變革ではなくて觀念の變革、あり意識の革命である。『對象に關する一切の賓辭は僕の立言であり、私の判断であり、私の——被造物である。もしそれらが私から離れて何等かの獨自なものにならうと欲し、或は私を畏敬せしめようとさへするならば、そのとき私はそれらをそれらの虚無、即ち創造者たる私の内へ取り戻すことが何よりの急務である。神、キリスト、三

位一體、道徳、善、等はこのやうな被造物である。それらについて私は單に、それらのものが真理である、と謂ふことを自ら許すばかりでなく、又、それらが欺瞞である、と述べることをも許すのである。私が一度それらの存在を意欲し、命令したやうに、またそれらの不存在をも意欲し能ふことを欲するのである。⁽¹⁹⁾ 「その存立のために他者の無意志を前提しなければならぬものは、この他者の製作物である。丁度主君が家來の製作物であるやうに。だから苦し屈従が止まれば、同時に支配も滅亡するであらう。』⁽²⁰⁾ 總ての根柢は意識の關係である。されば「私自らの意志は國家の壊滅者」なのである。

總ての固定觀念は意識變革によつて解消され、自我に君臨する凡ゆる暴君は自我の從順な臣下に引き下され、その所有物となり、その自己享樂及び世界享樂の手段となる。こゝに自我主義者の世界が展開し、真正の歴史が始まる。歴史の發展がこの眞理を我等に示してゐる。この眞理の歴史的顯現を我等は次に見ることにしよう。

個體發生は系統發生を繰返すと生物學者が我等に教へるが、人間の歴史も亦さうである。自

我主義者の世界の實現が歴史の動向である如く、自我主義者への完成が個人の發展過程である。個人の生涯は、子供、青年及び成人の三つの發展時期を経過する。小兒期は物への従属の時期である。物を支配しようとしてその底を究め、その背後に到達しようと努める。この抑へ難い欲求によつて小供は、漸次に自己に目覺め、從前打ち勝ち難いと思はれたものが漸次に小さく見えて来る。事物の背後を究めるにつれて我等はおひおひその背後のものに到達し、つひに理性或は良心の形をとつた精神の世界に入る。茲において子供は青年となる。「我等は今「我等の思想に沈湎」する。そして、前に兩親の、人間の命令に従つたやうに、思想の命令に従ふのである。我等の行為は、子供のときに兩親の云ひ付けによつてきめられたやうに、我等の思想（觀念、概念、所信）に従つてきめられる。」⁽²⁴⁾ だが青年はやがて成人となる。「人が體のある自分を愛し、その儘そつくりの自分を悦ぶやうになる時、その時初めて、人は自己自身のもしくは自我的の關心、即ち單に我等のではなく、全體の満足の、全人の満足の關心を、利己的關心を、有つのである。」「青年が他のものに、例へば神、祖國、等に夢中になると違つて、成人は寧ろ彼自身を中心とする」のである。要するに「子供は唯非精神的な、即ち無思想の、無

觀念の關心を有ち、青年は單に精神的の關心を有つ。成人は血の通つた、自己自身の、自我的の關心を有つのである。」⁽²⁵⁾ 子供は現實主義者であり、青年は理想主義者であり、この二つを止揚した成人は自我主義者である。

歴史の發展も個人の發展と同一の律調を辿る。茲に注意すべきことは、マルクスの指摘したやうに、スチルナフにとつては思辯的理念、抽象的表象が歴史の推進力であり、彼は具體的事實的歴史の研究の代りに數個の思辯的範疇及び若干の補助的範疇を以て歴史を構成したことである。従つて彼の歴史哲學に入る前に、マルクスの指摘した彼の諸範疇の辯證法的構成を見るのが便利である。⁽²⁶⁾

根本命題

- 一、現實主義
- 二、理想主義
- 三、兩者の否定的統一、「成人」。

第一の、命名

四、彼の思想體系

一、子供、物への従属（現実主義）

二、青年、思想への従属（理想主義）

三、成人（否定的統一としての）、肯定的に表現すれば、思想と物との所有者。否定的に表現すれば、思想と物から解放されたる。（自我主義）

第二の、歴史的な命名

一、黒人（現実主義、子供）

二、黄人（理想主義、青年）

三、白人（現実主義と理想主義との否定的統一、成人）

第三の、最も普遍的な命名

一、現実主義的自我主義者（普通の意味における自我主義者）、子供、黒人。

二、理想主義的自我主義者（犠牲的自我主義者）、青年、黄人。

三、眞の自我主義者（唯一者）、成人、白人。

第四の、歴史的な命名、白人のうちににおける以前の諸段階の繰返し。

一、古代人、黒人の白人、小兒的成人、異教徒、物への従属、現実主義者、世界。

二、近代人、黄人的白人、青年的成人、基督者、思想への従属、理想主義者、精神。

三、自我。完成基督者、完成成人、白人的白人、眞の自我主義者。

スチルナフにとつて人間は本質的に利己主義的なものであり、人間の歴史は利己主義の實現の歴史、利己主義的精神の自己發展の歴史である。支那人、ギリシャ・ローマ人及びゲルマン人を以て世界史を代表せしめたヘーゲルにならつて彼は黒人、黄人及び白人を以て歴史を代表せしめた。これは利己主義實現の一様式である。

古代はキリスト教以前の世界である。その時代において人々は自然に對して闘争しなければならなかつた。事物の世界に對する人間の態度は、初めは全く素朴的であつた。漸次に人間は自覺して來て、ソフィストの時代に至つて始めて精神を武器として闘争することが出來た。この理性の力の宣言を以てギリシヤの精神解放の第一期が始つたのである。人間を支配する力は併し人間の心情からも驅逐されなければならない。ソクラテスがこの仕事を始めて、懷疑論者がそれを完成したのである。懷疑論者にとつては、もはや世界も家族も祖國も存在しない。か

四、彼の思想體系

くして古代の末期において人間は完全に世界から解放されて世界の主人となり、事物の世界は精神によつて征服され、古代人は近代人となる。

自我が自身を高めて世界の所有者たらしめ、世界を征服し、無世界たらしめたことは、自我主義の最初の完全な勝利であつた。だがそれは最初の勝利にすぎない。自我主義の實現のためににはなほ幾多の苦闘を要する。『この世界の主人は、未だ彼の思想、彼の感情、彼の意志の主人ではない。彼は精神の主人でも所有者でもない』なぜなら精神はなほ神聖であり、「聖なる精神」であつて、「無世界」の基督教徒は「無神」になり得ないからである。古代の闘争が現世に對する闘争であつたならば、中世の(キリスト教の)それは自己自身、即ち精神に對する闘争である。前者は外界に對するものであり、後者は内面的な世界に對するものである。中世人は、「彼自身の内へ顔を向けた」思索する冥想的な人である⁽²⁸⁾キリスト教以後「聖靈をより人間的にし、それを人間に、若くは人間をそれに近づけようとする努力」が續けられた。⁽²⁹⁾『殆ど二千年の間、我等は聖靈を我等に從へようと努力し、神聖の多くの破片を次々に引きちぎつて、脚下に踏みしだいた。が、この巨大な敵手は常に姿を變へ名を變へ新しく起き上つ

て来る。』⁽³⁰⁾ 所謂中世紀に終りを告げしめたルーテルが出て、人間は眞理を把握しようとする時彼自身が眞理そのもののやうに眞正にならなければならない、といふことを最初に教へた。デカルトが出て、思惟のみが實在すると宣言した。聖なる精神は茲に幾多の試練を経て、何時の間にか「絶対理念」に變じ、それは再び幾多の屈折を経て、人類愛、合理性、市民的道德等の種々の觀念に分裂した。即ち近代の最後の段階である自由人の時代となつたのである。

自由人はキリスト教の神祕を曝露し、人間の最高性を宣言した。だが、彼等は依然として自由主義の眞理に到達し得なかつた。『自由主義は唯異つた概念を持ち出したにすぎなかつた。即ち神の概念の代りに人間の概念を、教會の概念の代りに國家の概念を、信仰の概念の代りに「科學的」のそれを、或ひはもつと一般的に云へば「なまの儘の教條」や規則の代りに眞正の概念や永遠の法則を持ち出した』にすぎない⁽³¹⁾三種の自由主義と共にこの點において變りはない。『政治的自由主義は、主人と下僕の不平等を撤廃した。それは無主にし、無政府にした。主人は自我主義者である個人から引き離されて、法律或ひは國家と呼ばれる幽靈になつた。社會的自由主義は、所有の不平等、即ち貧者と富者とを廢止する。それは無所有、若くは無財産

にする。財産は個人から取り去られ、幽靈的な社會に委託される。人道的自由主義者は無神にし、無神論的にする。故に、個人の神、わが神は廢棄されねばならない。」だが、その代りに人類の信仰が起る。⁽²⁾ 要するに自由人も固定觀念の奴隸であり、妖靈の傀儡に他ならない。それはキリスト教の最後の變態である。

歴史はかかる過程を辿つて來た。そして今やスチュルナにおいてその轉廻點に到達したのである。妖靈の支配の最後の根據をつき止めて、彼は前狼後虎の災厄から人類を救はうとするのである。觀念を取り代へることが問題ではない。これを追ひ出し、これを無にすること、これをその創造者に解消し自我の所有とすることが肝要である。過去數千年來人は憧憬に希望に生きて來た。だが自我主義者は彼自身及び世界の享樂に生きる。我等の時代の門には、「汝自身を知れ」ではなくして「汝自身を享受せよ」と書いてゐるのである。

(1) マルクス、『ヘーゲル法律哲學批判序説』、マルクス＝エンゲルス全集第一巻、四四〇頁。

(2) スチュルナ、『唯一者とその所有』、草間平作譯(岩波文庫)、二一八頁。

(3) 同前、一三頁。

(4) 同前、一三頁。

(5) 森戸辰男、「スチュルナの無政府主義とマルクスの國家觀」、大原社會問題研究所雑誌、第五卷第一號、四二一四五頁參照。

(6) 同前、一二二頁。

(7) 「唯一者」、八三頁。

(8) 同前、一二三四頁。

(9) 同前、一二三頁。

(10) 同前、一二三頁。

(11) 同前、一二三頁。

(12) 同前、七頁。

(13) 同前、二三九頁。

(14) 春月、前掲書、五二頁。

(15) 同前、五二頁。

(16) 同前、八一頁。

- (17) 同前、八一頁。
- (18) 同前、一五〇頁。
- (19) 「唯一者」、四九四—九五頁。
- (20) 森戸、前掲書、八二頁。
- (21) 「唯一者」、一七頁。
- (22) 同前、一九頁。
- (23) „Sankt Max“ S. 100—103. 第四の歴史的命名における細目は省略した。
- (24) 「唯一者」、一三〇頁。
- (25) 同前、一三一頁。
- (26) 同前、一三〇頁。
- (27) 同前、一二三頁。
- (28) 同前、二〇二頁。

五、彼の思想への批判

スチュルナアのイデオロギー論はドイツ的イデオロギーであり、青年ヘーゲル派の一つの代表的典型であることは、何よりも念頭におかなければならぬことである。彼は青年ヘーゲル派の一員としてヘーゲル哲學に反撃を加へたが、併し依然として彼はヘーゲルの義中のものである。彼は學生時代ベルリン大學でヘーゲルの講義を聞き、初期の論文にはヘーゲルの影響が顯著に現れてゐる。(一) ヘーゲルに反対したその主著も、全卷これへーゲル的精神によつて充たされてゐる。全編を通じてトリアアードと辯證法が貫いてゐる。マルクス・エンゲルスは彼の著書を逐次的に検討してそのヘーゲルからの援用を々々指摘し、彼の歴史的反省の全部はヘーゲルから集められたものであると謂つた。しかもヘーゲルは包括的な實證的知識と大なるエネルギーと深い洞察とを以て全歴史及び現在の世界の大體系を構成したのであるから、觀念論的な彼の體系は幾多の眞理を包藏してゐるが、手許に傳へられた構成を自分の目的に利用し變容した

スチュルナウは、喜劇的な結果に導くのみである。彼の唯一者はヘーゲルの『精神の哲學』に対する反動であり、彼の痛切な肉の叫びはヘーゲルの『精神の支配』に対する叛逆であると云はれてゐる。⁽²⁾ ヘーゲル哲學は一切を思想へ、聖なるものへ、妖怪へ、精神へ、化物へ、幽靈へ變へた。スチュルナウはこれと戦つて、彼自身の想像の中で克服し、彼等の屍の上に彼の「自我」の、「唯一」の、「有體的」の世界王國を、「全人」の世界王國を建設しようとした。だが要するに彼はヘーゲルのうちに在つてヘーゲルに叛逆し、その仲間と論駁したのみで、觀念の領域から脱して實在の世界に入ることが出來なかつた。歴史的現實そのものゝ研究は彼にとつて第一次的なものではない。思辯的理念、抽象的表象を歴史の起動力として、數個の單純な範疇を以て歴史を構成し、現實の歴史の研究の代りに哲學史を思辯したのである。

何故に彼は人間生活の現實的土臺に迄下降して歴史を把握し得なかつたか、その原因は種々挙げられ得る。隱遁的生活はその一つに數へられやう。「その生活が世界に對する多様の活動と實踐的交渉との龐大なる圈を包括し、從つて多面的生活を營む一個人にあつては、思惟は、この個人の他の凡ゆる生活表現と同じく、普遍性の性質を有つ。……それに反して、その活動

が一方おいては偏屈な勞働に、他方においては思惟の享樂に限られ、その世界がモアビットからケエベニックにまで及びそしてハムブルグ門の下で板で釘付けにされてゐたところの、この世界に對するその交渉がみじめな生活地位を通じて最小限度に減ぜられてゐるところの、局限せられたベルリンの學校教師または著作家にあつては、かくの如き個人にあつては、彼にして思惟意欲を有つとせば、思惟がこの個人及び彼の生活自體と同様に抽象的になること、それが全然無抵抗な彼に對して一つの確固たる權力、その活動が個人に一つの瞬間的享樂といふ彼の「惡しき世界」から一つの瞬間的救濟の可能性を與へるところの權力となることは、避け得ないことである。⁽³⁾ 彼の性格的特徴もまた考慮を要するものの一つであらう。由來身體の虚弱な人は自分の身體機能の障礙のために自己のことに顧慮することが多く、從つて自我主義的な傾向がある。殊にキルケゴールやニーチェの如く精神病に患ふ人は極端な個人主義に趨る傾向がある。スチュルナウも身體は虚弱であり、彼の母は精神病の系統を引くものであつた。⁽⁴⁾ 人は現實において充されないものを夢において或ひは觀念において驅使し復讐する傾向があるが、溫和で寧ろ薄志弱行であつたスチュルナウも、書物の上では驕激無比な鬭争家であつた。

法律は唯一者の關知するところではないが、併し我が唯一者は借金のことで彼の關知しない法律のために二度迄留置された。激越な彼の蝸牛殻中の自由論の原因の一つは彼の特異的性格に在ると見ることが出来るであらう。だが決定的な原因是、その認識に對する歴史的制約である。人類の認識は歴史的社會的狀態に制約されるものである。人間生活の眞の土臺は人間の意識に在るのではなく、また身分的關係法律的關係に在るのでなくしてその物質的生活に在ることは、市民社會の發展がある程度まで進んだ時に始めて認識され得るものである。歐洲各地に活躍し資本主義の先進國を觀察考究したマルクス・エンゲルスは、十九世紀の四〇年代に彼等の唯物史觀に到達したが、プロレタリアートとブルジョアジーの階級對立の未だ明瞭に現れない十九世紀前半のドイツに住み、殊に終生ベルリンに蟄居したスチュルナウは、蝸牛殻中にとじ籠つて天下を操縱することになるも自然のことであらう。

要するに唯一者は「人間一般ではなくしてある人間、半は飢えたる學校教師カスバ・シミットが三月以前のベルリンにおいて知り得たところの、最も進歩した種類の人間であつた。即ち、無制限の競争に、彼の存在の全き享樂に生きるために、もはや專制主義から甘やかされよう

とはせずして充分に強力になつたところの資本、彼の財産を有てるブルジョア」であり。⁽⁵⁾ この個人主義は「現在の社會、現在の人間の意識化せられた本質にすぎず、現在の社會が我等に抗辯し得る最後のもの、既存の愚蒙を抜けきらぬ凡ゆる理論の頂端」にすぎないのである。⁽⁶⁾ 自我主義者の組合は『反逆的小市民のユートピア』以外の何物でもなく、スチュルナウは「市民的個人主義の最後の言葉を宣言したもの」である。⁽⁷⁾

一八四四年に著書を出して青年ヘーゲル派の哲學戰爭の一騎士として花々しく參加したスチュルナウは、一八四四年の革命後の反動期に凡ゆる哲學と共に忘却の大海上に掃き込まれた。少壯氣銳なドイツ市民階級はもはや彼を必要としないのである。ところが、十九世紀の末葉に至つて彼は再び呼び起された。彼の忠實な崇拜者マッケイは十年間彼の生涯と事績の研究に身を捧げた。⁽⁸⁾ 久しく坊間から姿を消した彼の著書は一八九三年レクラム文庫の一冊として翻刻され、諸外國語にも翻譯された。ハルトマン、パッシュ、エルドマン等が彼について論じ、世人もおひおひ彼に注目し出した。殊に前世紀の八十及び九十年代のニーチェ熱は世人の注意を彼に向けしめ、ハルトマンの如きは彼を以てニーチェよりすつと優れてゐるとなしてゐる。⁽⁹⁾ 現在

では「唯一者」は古典の一つに數へられ、直從屈從をこととする俗人にはよくきく一服であるが、その超現実的な天馬行空論は蝸牛殻中の自由論者のみを満足させるであらう。

だが、別の意味で彼は偉大な貢獻をした。ヘーゲル哲學の最後の驟激な形態としてマルクス、エンゲルスの批判を引き起し、唯物史觀建設の消極的な一資料となつた意味で。既に『唯一者』の見本刷を讀んだ時にエンゲルスはマルクスへの手紙の中で、彼の個人主義を評した後に『だが併し、それだから事柄は重大なのである。たとへばヘッズがさう思ふより以上に重大なのである。我等はそれを放つたらかしておいてはならない。寧ろ既存の愚鈍の完全な表現として、まさにそれを利用しなければならない。そして我等がそれを覆すことによつて、その上に建設を續けなければならない。』⁽¹⁰⁾と謂つた。彼等はその『ドイツ・イデオロギー』でそれを實行した。彼等はドイツ哲學の最近の代表者なる青年ヘーゲル派のイデオロギーの社會的地盤を指摘し、その果敢壯烈なる觀念革命の真相を曝露した。「意識を變化せよ」といふこの要求は、畢竟現存するものを違つて解釋せよといふ換言すれば、それをある違つた解釋によつて承認せよ、といふ要求になる。青年ヘーゲル派のイデオローグたちは、彼等の所謂「世界を震動せし

める。」言辭にも拘らず、最大の保守主義者である。彼等のうち最も新進の人々が、彼等は唯「言辭」に對してのみ闘争する、といふことを主張するのは、彼等の活動にとつて正しい表現を見出したものといふべきである。唯彼等は、彼等のこれらの空語そのものに空語以外の何物をも對立せしめてゐるのではないといふこと、また彼等にして單にこの世界の空語に對して闘争するのみであるときには、彼等は現實に存立するところの世界に對して決して闘争してゐるのではないといふこと、を忘れてゐるのである。』⁽¹¹⁾而して「自分を狼と見做しましたそのやうに見做されてゐるこれらの羊どもの正體を曝露し、如何に彼等がドイツ市民たちの諸觀念に對して唯哲學的に吼えついてゐるにすぎないかといふこと、如何にこれらの哲學的解釋家たちの大言壯語が唯現實のドイツの諸狀態の慘めさを反映してゐるにすぎないかといふこと」を示し、それの、「夢想的で愚鈍なドイツ民族の性に合つてゐるところの現實の影を相手とする哲學的闘争の弱點」を曝露し、その信用を奪ひ取ることを彼等の任務としたのである。⁽¹²⁾

ヘーゲルの『神人』はフォイエルバッハにおいて『人間』となり、スチュアードにおいて『唯一者』となつたが、マルクス＝エンゲルスにおいて具體的歴史的な『社會化された人間』とな

第五章 スチルナのイデオロギー論

〔一九二〕

つたのである。マルクス＝エンゲルスへの發展にスチルナの歴史的意義が存するのである。

- (1) Strugurescu: a. a. O. S. 9. Engert: a. a. O. S. 28.
- (2) Strugurescu: a. a. O. S. 18, 25.
- (3) " Sankt Max u. S. 254. ルクス＝エンゲルス全集、第七卷の二、三〇—三一頁。
- (4) Strugurescu: a. a. O. S. 13.
- (5) Mehring: a. a. O. S. 263.
- (6) ルクス＝エンゲルス全集、第十七卷、一三頁。
- (7) ドレーヘア、「無政府主義と社會主義」、百瀬二郎譯、四七頁。
- (8) Mackay, John Henry: Max Stirner. Sein Leben und sein Werk. 1893.
- (9) Strugurescu: a. a. O. S. 3—4, 2—3.
- (10) ルクス＝エンゲルス全集、第十七卷。一三頁。
- (11) ルイ・エ・ド・コロニー、四四一四五頁。
- (12) 同前、三七頁。

第六章 ニイチエのイデオロギー論

1. ニイチエの時代

スチルナとニイチエの二つの名前は緊密な關聯を思ひ起させる。スチルナの「唯一者とその所有」の出年(一八四四年)にニイチエが生れたのも、奇縁と謂ふべきであらう。だが、スチルナが『三月』以前の人(ドイツ産業革命以前の人)であつたのに對して、ニイチエは資本主義時代の、しかも發展した資本主義時代の人であつた。等しく個人主義者である彼等の間に自ら顯著な相違が存在するのである。

『三月』(一八四八年)はドイツの歴史における一つの分水嶺である。三月革命は、根本において封建的勢力に對する市民階級の鬪争であつたが、市民階級の勝利は、プロレタリアートの支持によるものであり、殊に市街戦におけるプロレタリアートの活躍は與つて重要であった。

1. ニイチエの時代

二九三

一旦、勝利を収めたブルジョアジーは、危険極まるプロレタリアートを牽制するために封建的勢力と妥協した。殊にパリーにおける革命の失敗と反革命の勝利は、封建的勢力に力を與へ、武器を用ひて舊い秩序を恢復した。それ以後六〇年代迄、ドイツは反動の浪に被はれたのである。三月革命の成果を収めたのは、依然として大諸侯であった。併し彼等は今や『三月』以前の舊態に止まることが出來なかつた。興隆する經濟の力はあまりに强大であつて、彼等はブルジョアジーと妥協しなければならなかつた。一方において、封建的義務とツンフト的制限の廢止は、ドイツ資本主義の發展の道を拝へた。カリナルニア（一八四八年）及びオーストラリア（一八五一年）における金鉱の發見は、世界資本主義に活氣を呈せしめたが、ドイツでは、殊に一八七一年の普佛戦争の勝利によつて多額の賠償金と新たな領地が得られ、產業は大飛躍をなした。商業資本主義は産業資本主義に發展し、小規模の國民經濟は、統一的な民族國家の實現と共に、完成された國民經濟となつたのである。

三月革命以後におけるドイツの經濟の飛躍的發展は、諸種の經濟史の文獻における統計的數字が我等に示すところである。試みにその一二三を見よう。蒸氣機關の使用は、一八四〇年には

六三四臺、一二二七三馬力であつたが、一八七五年には、三五六八四臺、二五一九五一三馬力になつた。機械工業は益々發達し、それと共に手工業はいよいよ衰退に向つた。手工業的紡績業者は、一八四九年には八萬四千人あつたが、一八六一年には一萬四千人に減少した。石炭の產額は、一八四八年では四百四十萬噸であつたが、一八八八年には十五倍の增加を見、六千五百四十萬噸となつた。生鐵の產額も、一八六〇年には五十二萬噸であつたが、八〇年にはその五倍、二百七十二萬噸に増加した。鐵道の延長も急激に増加し、一八五〇年に六千軒であつたのが、八〇年には三萬三千軒になつた。諸種の生産物の增加や産業施設の完備と共に、經濟組織も亦變化をした。小商業は大商業となり、更に外國貿易の發達を見るに至つた。諸種の交通、通信、銀行、取引所も顯著な發達をとげ、農業國は工業國となり、ドイツは今や精銳な資本主義國として世界の舞臺に登場した。

ドイツ資本主義の飛躍的な發展は、その急激な展開を齎した。内部的の發展と共に、先進資本主義國の帝國主義との競争は、ドイツの獨占資本主義の發達を促した。六〇年代から七〇年代迄は、自由競争の發展の頂點で、獨占はやつと萌芽を示すにすぎなかつた。一八七三年の大

恐慌以後カルテルは發達したが、併しそれは尙一時的な現象にすぎなかつた。十九世紀末の好況と一九〇〇—一九〇三年の恐慌以來、カルテルは全經濟生活の基礎になつた。金融資本家の寡頭政治、帝國主義的鬭争は、やがてドイツを世界大戰に導く。發展する新しい經濟の力は、產業資本主義的社會組織と矛盾するに至り、こゝに社會的危機が醸された。而してわがニイチエは、危機を孕むドイツ帝國主義の高潮期に生活した人なのである。

資本主義の發展は、謂ふ迄もなく反面においてプロレタリアートの發展を意味するものである。三月革命以前英佛において既にプロレタリアートの階級的活躍を見たが、產業發達の著しく遅れたドイツにおいては何等見るべきものがなかつた。ところが三月革命を一期として、ドイツのプロレタリアートは擡頭したのである。三月革命の直前に、ドイツにおいてもフランスやイギリスと同様にブルジョアジーとプロレタリアートの對立が明確になつたことが感知された。三月革命においてプロレタリアートは重要な役割を演じたが、革命成功の曉に至つてブルジョアジーの裏切るところとなつた。労働者はこゝにおいて奮起し、シュテファン・ボルン等の指

導の下に、四月に労働者中央委員會が開かれ、八月に労働者大會が開かれた。革命の直後に多くの共産主義者同盟の會員がドイツに入つて指導の任に當つた。だが、やがて反革命の勝利となつて、労働者の運動は壓へられ、殊に五〇年の好況は反革命の支柱となつた。五四年に労働者の團結が禁止されてからドイツにおける初期の労働運動は一段落を告げた。その後、ラッサールが現れて労働運動を指導し、彼の死後にその組織した一般ドイツ労働者同盟から第一インタナシヨナルに所屬するアイゼナッヘルが分離した。これがドイツ社會民主黨である。その後、ラッサール派とアイゼナッハ派との集散離合があつたが、資本主義の發展と共に労働者の階級的結成は益々強固となり、政府の幾多の彈壓にも拘らず社會黨は増大して一八九〇年の選舉の勝利となつた。乍併、そのカタストローフに臨む帝國主義に對して、第二インタナシヨナルは遂に如何とも仕様がなかつた。

十九世紀後半におけるドイツの觀念界の状勢を極く簡単に概観しよう。ヘーゲル哲學の崩壊後、その力強い反動として唯物論が現れた。殊に一八五四年の自然科學者大會におけるフック

トとワグナアの論争は有名なものであつた。だがこの唯物論は自然科學的なものであつて、社會的な諸問題にはふれず、大革命前のフランス唯物論よりもある意味において粗雑なものであつた。三月革命後にショベンハウエルの意志の哲學は、新興ブルジアジーの實踐的意氣に投じて廣く行き渡つたが、併し實踐的な市民社會は哲學よりも自然科學を要求した。十九世紀における自然科學の發展は、驚異的な現象であつて、そのうちでもヘルムホルツによつて完成されたエネルギー恒存の原理やダーウィンの進化論はニーチェに影響するところが少くなかつた。(尤も彼はこれらを批評したが)十九世紀後半以後における社會科學の發展も顯著な現象であつたが、これは直接ニーチェに影響するところが少かつたやうに思はれる。

一八七一年にドイツの統一が完成されてから、封建的勢力はブルジアジーと接近し、資本主義は更に躍進をした。他方において労資の對立も亦尖銳化し、こゝに社會の安定化が必要となつた。ビスマルクの社會政策はその政治的の現れであるが、「認識論的深化」や「基礎付け」はその哲學的の現れと見ることが出来やう。七〇年代以後における哲學の復興、殊に新カント學派の興隆は、この事情を物語るものと思はれる。

これを要するに、ニーチェがその處女作を公にした一八七一年以後ドイツの經濟は急激な發展をとげ、やがて堅強した帝國主義はそのカタストローフに臨んだ。諸種の生活領域において危機が顯著となり、イデオロギーの領域においても、殘存的な封建的イデオロギーや自由主義的イデオロギーは、新しい生活關係と乖離し、無力なもの、頹廢的没落的なものとなつた。しかも、第一インタナショナルの社會主義は、勃發しやうとした帝國主義的戰爭に關して小田原評定をなすのみで手の下しやうがなかつた。この危機を克服しようとしたのが、ニーチェのイデオロギーなのである。

11、彼の生活と著作

フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ニイチエ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) は一八四四年に生まれて、一九〇〇年になくなつた。祖先はボーランドの貴族で、父は牧師であつた。父はプロイセン王フリードリッヒ・ヴィルヘルムの知遇に與つたが、丁度王の誕生日（四月一五日）にニイ

チエが生れたので、記念の意味でフリードリッヒ・ヴィルヘルムと名付けた。母方も牧師であった。五歳の時に父を失つた。十四歳から二十歳迄オルダのギムナジウムに在學し、パウル・ド・イッセンと親交を結んだ。一八六四年ボン大學に入り、六五年にその師リッチュルと共にライプチヒに移つた。六七年の八月に軍隊に入つたが、教練中に怪我をして除隊を命ぜられた。六八年に再びライプチヒに戻り、六九年リッチュルの推薦でバーゼル大學の教授となつた。一八七〇年の普佛戦争に志願兵として出征したが、流行病に冒され、その後すつと健康が悪かつた。七年以後種々の著書を公にした。七六年にバーゼルの教授を辭してひたすら著作に専心したが、多年の病苦のために一八八九年の正月に精神の異常を來し、一九〇〇年八月二五日になくなつた。

彼は多少の遺産を相續し、バーゼル大學からも年金を受けて、十分に裕福とは云へないが生活資料に辛酸をなめることはなかつた。だが、内面生活は苦悶苦鬱に充ちたものである。病弱な身體のために終生苦んだ。性格は非常に内氣で慎み深く、子供の時から孤獨を愛し、人を避け自然に親しんだ。大學においてもブルシンセンシャフトをきらひ、殊に *Herdentinstinkt* と *Bi-*

ermaterialismus に反感を懷いた。彼の虚弱な身體と内氣な性格と精神病とは、彼の極端な個人主義の原因の一つであつたであらう。

ニイチエの著書は次の通りである。

一八七一年。音楽の精神よりの悲劇の出生。

一八七三一七六年。時節外れの考察。

一八七八一八〇年。人間的、あまりに人間的。

一八八一年。黎明。

一八八二年。悦ばしき科學。

一八八三一八五年。ツラトストラは斯く語る。

一八八六年。善惡の彼岸。

一八八七年。道德系譜學。

一八八八年。ワグナーの件。

二、彼の生活と著作

一八八八年。ニイチエ對ワグナア。

一八八九年。偶像の薄明。

一八八三—一八八八年。力への意志。

次に我等は彼の思想の發展について見よう。ヴァラトストラは三つの變態をなしたといふが、わがニイチエの思想も三つの發展段階を辿つた。彼はキリスト教的な家庭に育つた人であつた。父方も母方も共に牧師の家の出で、殊に彼の祖母は厳格な敬神家であつた。父の死後祖母の許に引き取られたが、そこでは祈禱と説教が規則正しく繰返されて、家庭がさながら一つの教會であつた。この宗教的な界囲氣は彼を充分キリスト教の精神にひたらしめた。ボルタに入つた後、彼は、陰鬱なヘブライの世界の他に今一つ光明に充ちたヘラスの世界の存在することを發見した。これは彼にとつて絶大の驚異でなければならない。異教の魔がさして、彼は既にボルタ時代に神聖なキリスト教に對して懷疑反感を懷いて家族を困らせた。ボルタの卒業論文で彼はギリシャの詩テオグニスを取扱ひ、その貴族的道徳に魅惑されて了つた。ボン大學で

彼は哲學、言語學、音樂、神學の四つを主として研究したが、家族の希望によるところの神學は一向彼を引きつけなかつた。

彼の思想發展は次の三期に分けられてゐる。

(一) 一八七六年頃迄のシ・ベン・ハウエル、ワグナア時代。

(二) 一八八〇年頃迄の實證主義の影響を受けた時代。

(三) それ以後の獨創成熟の時代。

シ・ベン・ハウエルとワグナアは彼の生活に一轉機を齎した。一日彼は古書店の店頭でショベンハウエルの『意志及び表象としての世界』を翻讀して感激し、食るやうにそれを讀破した。彼はこゝに彼の『教育者』を見出し、『生の立脚地』を得たのである。全自然の最も奥深い本質は意志であり、「生きんとする目的的意志」である。凡ゆる悲惨事がこれから發生する。この生の苦痛からの最も安易な逃避所は、悲劇的藝術である。この世界意志を最もよく表現するものは音樂であつて、實に音樂によつて森は囁き牧場は歌ふのである。この音樂と悲劇との結合のうちにこそ生の最高の肯定が存するのである。而して悲劇的藝術の發生と發展に向つて努力す

二、彼の生活と著作

るのが人類の最高の使命である。ギリシャの悲劇は音樂悲劇であり、ワグナアはその再生者である。ギリシャ、ショベンハウエルとワグナアの三つが融合して出来たものが一八七一年の彼の處女作『音樂の精神よりの悲劇の誕生』であつて、彼は本書を、ショベンハウエル的天才の具現者たるワグナアに捧げた。

凡ゆる苦難を克服して伸長し發展して行かうとする悲劇的藝術家のうちに、既に超人の萌芽が含まれてゐることは明かである。だが、音樂悲劇による人生の肯定は逃避的な肯定であり、必ずしも現實の生そのものの肯定ではない。我等は現實そのものを冷靜に緻密に認識する必要がある。疊つた未熟な藝術家よりも、明朗でとらはれない思想家の方がすつと重要である。ワグナアから離れ、友人バウル・レーによつて英佛の實證主義哲學を知り得たニイチエは、今やその思想發展の第二期に辿りついた。今や生は彼にとつて認識への道具であり手段である。

認識人も併しつひに彼を満足させることが出來なかつた。我等は冷靜な認識を目指すが、認識そのものが一つの意志活動であり、內的本能の作用である。又認識されたものの達成にも、我等の力強い活動が必要である。『人間の救済は認識に存せずして創造に存する。』我等は一層

本質的なものに立ち入らなければならぬ。かくして、彼は「力への意志」の世界へ、「超人」の世界へ到達したのである。

三、彼の哲學の基調

ヨーロッパの世界をニヒリズムが、ヨーロッパ的佛教が風靡してゐる。これは由々しきことだ。

人類のデカダン、人類の衰亡にかかる一大事件だ。しかも、歴史的感覺を有たず生理學の知識を有せず未來への目標を有たない哲學者達は、爲すところを知らずに暗中摸索をしてゐる。ニヒリズムの潮流は、生理的頽廢の表現であり、デカダンの必然的結果に他ならない。だが、世の識者は本末を顛倒してゐる。彼等には事物の真相を見きはめる能力がない。由來人間の世界は矯飾に満ち誘惑にあふれるものである。『人間は常にその内面世界の根本事實に關して、如何に虚妄であり、欺瞞的であつたことかよ。』^(一) 道徳、宗教、哲學などは、神聖なもの、莊重なものとして我等に望んでゐる。それらに對していさゝかの疑を懷くだけでも、許すべからざる冒瀆である。だが、我等は用心をしなければならない。我等は、これら神聖なものに對して絶

對的な懷疑を向かなければならぬ。道徳の魅力の下に立つことなく、その美しき身振やまなさしの詭計に疑を有しながら、それを考察しなければならない。我等は、道徳的評價そのものを一つの批評に從はせるべきである。服従を要望して批評を要望しないところの道徳的感情衝動に對し、「何故の服従か」といふ問と共に、それに停足を命すべきである。「それらのもの實によつて汝等はそれらのものを識るべし」と道徳について從來我等は教へられて來た。だが、こゝにニーチェは新しい教説を提示する。『それは一つの果實である。その果實によつて私は、それが成長して來たところの土地を識るのである。』我等は、凡ゆる價値の『賤しき血統』を辿らなければならぬ。⁽²⁾ 究源的な探求によつて最も根本的な事實に迄溯及し、イデオロギーをその地盤に還元しなければならない。その際我等は、在來の科學に頼ることが出来ない。

原因と結果の簡単な關係、平衡狀態、各々の方における力の同量、これらが在來の科學の證明しようとしたところである。だが、我等は更に進んで勤因的な力の概念に迄溯源しなければならない。我等の物理學者がよつて以て神及び世界を創造したところの「勢力」といふ勝ち誇つか概念は、更に今一度の補足を加へられなければならない。純粹に機械論的意義における『牽引』及び『反撥』は一つの完全なる虛構であり、一つの言葉である。我等は、一つの意圖なしに一つの牽引を考へることは出來ない。一つの事物を占有しようとする意志、或ひはその力に對して自らを防衛し、それを拒斥し去らうとする意志、それなしには理解されない。ある事物が何時も斯様斯様に起つて來るといふ事實は、あだかも、一つの存在が一つの法則又は一つの立法者への服従の結果として、何時も斯様斯様に行動したかの如く解釋される。乍併別様に行動し得ないといふことは、右の存在自體から生じ得るものである。それは法則に従つて斯様斯様に行動したのでなく、寧ろそのやうに構造されてゐた故にそのやうに行動したのであり得た。我等は事物の假象や表面的事實に捉はれてはならない。凡ゆる運動、凡ゆる『現象』は、凡ゆる『法則』は、單に一つの内的現象としてのみ理解されなければならない。⁽³⁾ 我等は先づ世界を考察して見よう。

古往今來、人類の驚異の的となつたのはこの世界である。この世界といふ怪物は如何なるものであるか、この世界は、「始めもなく終りもない力の怪物」である。それは、「より、大きくなり小さくならないところの、自ら消耗しないで、唯變化するばかりであるところの、一つ

の固定した、黄銅の如き力の量』である。『全體としては不變の大きさで、その經濟は支出もなく損失もなく、けれども同様に收入もなく、その限界からの如く「虚無」から取り圍まれてゐる。それは何等の漠然たるものでなく、何等の浪費されたものでなく、何等の無限に擴げられたものでなく、寧ろ一定した力としてある一定した空間に置かれてゐる。寧ろ力として到るところにあり、諸の力及び力の波の活動としては、一にして同時に多であり、こゝで自らを集積してゐるかと思へば、同時にそこで自らを減少してゐる。それはそれ自身の中に暴れ狂ふ諸の力の海で、回歸の巨大なる年數と共に、その形態の満潮干潮と共に、永久に自らを變化し、永久に引き返して來る。』一切の物は生成し、永久に回歸する——脱出は不可能である。エネルギー恒存の原理は永久回歸の原理を要求する。世界は永久に回歸しなければならぬものとして、何等の飽滿をも、何等の嫌惡をも、何等の倦怠をも知らない一つの生成として、それ自らを祝福する。『この世界は力への意志であつて、その他の何物でもない。』⁽⁵⁾

この世界そのものが一つの力への意志であるが、その上に存在棲息する萬物も亦力への意志に他ならない。下は無機物から上は人間の精神生活に至る迄、一切實在の本質をなすものは、

他を壓倒克服し、常により多く、より大きく、より強くならうとする傾向である。即ち力への意志である。存在することは動くことであり、動くことは力への意志の對抗闘争である。『唯一の實在性は各々の力の中心からより、強くならうとする意志である——自己保存でなく、寧ろ攝取しようとする、支配者にならうとする、より、強くならうとする、より、強くならうとする意志である。』『各々の特殊なる物體は、全空間の支配者になり、その力を擴大し、またその擴大に抵抗する一切のものを突き飛ばさうと努める。』⁽⁶⁾ 物理的原子は一個の量的生活意志である。エネルギーの持續だけでなく、更にその浪費の最少額も亦力への意志の現れに他ならない。無生物から生物に上るにつれて、力への意志は一層はつきり現れる。『生き物といふ概念は、それがその力を擴大し、従つて外界の諸の力を自分自身の内へ取り入れなければならぬといふことを含蓄してゐる。』試みに最も單純な場合を、原始的營養の場合を取つて見やう。原形質は、彼に抵抗する何物かを求めるためにその虛足をさしのべる。空腹からではなく、寧ろ力への意志からである。それから彼はその物に打ち克ち、攝取し、同化することを試みる。營養と呼ばれるところのものは、より強くならうとするあの根本的意志の結果であり、利用である

にすぎない。更に、かの原生林の樹木の互に相争ふのも、力への意志によるものに他ならない。生物の身體も亦一つの統治物であり、貴族制と奴隸制が施行されてゐる。高級な典型は、低級な典型を一機能にしてしまふことによつて初めて可能である。「凡ゆる生物において最も明白に示され得るのは、それが自らを保存せぬために、寧ろより大きくなるために、凡ゆることをなすといふことである。」要するに『生命は力への意志の特殊なる一つの場合にすぎない。』『力への意志の特殊なる一つの場合である生命を、我等はより詳密に規定しなければならない。』『一つの共通なる營養作用によつて結合されたる一群の力を、我等は名付けて「生命」といふ。』生命とは、「種々なる闘争力が不捕に成長して行く、力を確立する諸經過の持続的一形式」である。(1) 生命の生命たる所以は、より多き生命に在る。『生命とは、成長への、持續への、力の集積への、權力への本能である。』生命の原理、生命の意志は、「力への意志」である。嚴密に謂へば、「生命への意志」ではなくして「力への意志」でなければならない。「生命は本質的に他者及びより弱きものの獲得、毀壊、壓服であり、自己と同形態のものの壓迫、冷酷、壓制であり、併合、そして少くとも最も寛大な掠取である。掠取は、腐敗した或ひは不完全なそしてはゐない。(2)

て原始的な社會に屬するものではない。それは生き物の本質に屬する。有機的な基本機能としてそれは、まさしく生命の意志であるところの本來の力への意志の結果である。(3)

事物は何よりもその内的本質について探求されなければならない。從來の生物學者の誤謬はまさにここに存在する。營養、誕生の土地、空氣、社會といふやうなものが我等の意志を變化し、我等の行動を決定すると世人は謂ふ。だが、我等の意見は我等のために我等の養育、我等の養育の土地、我等の雰圍氣、我等の社會を規定するのである。「外的事故」の影響はダーウィンにおいて馬鹿々々しい程過重されてゐる。だが、生活作用における本質的なものは、外的事故を用ひ盡し、搾り取るところの、巨大な、形成的な、内側から形式を造つて行く力、まさしくその力である「生命は、外的條件への順應でなくして、寧ろ内部からいよく多く「外部」を略取し同化するところの、力への意志である。」內的な力は限りなく優越である。外部からの影響の如く見えてゐるところの多くのものも、内部へのそれの順應にすぎない。嚴密に同一の環境が正反對に解釋され使用され得る。一個の天才はかくの如き成立條件からして説明されてはゐない。(4)

自然現象は、多くの人が信するやうに、一つの原因があつてその後に結果が現れるといふやうなものではない。存在するものは、ある段階における力の闘争と他の段階における力の闘争である。前段階と後段階は因果關係で結ばるべきものでなくして、全然性質内容を異にするものである。動植物界全體が低級なものから高級なものへと發展するのではない。寧ろ總てが同時に鎬ぎ合つて、混り合つて、また對抗し合つて發展するのである。自然の狀態は、ダーウィンの主張するやうに、窮乏や餓饉ではなくして、寧ろ豐饒であり、大なる浪費である。自然のうちに行はれるのは、存在の爲の闘争といふやうな卑賤なものではなくして、生氣横溢せるもの間における葛藤であり、力への意志と力への意志の間の闘争である。

生命の内的本質としての力への意志の眞理性を確證するために、我等は更に二三の所説を検討しよう。自己保存、生長、飢、快感等が生命の本質的機能に數へられることがある。だが、これは表面的事實に囚はれた觀察で、我等は一層本質的なものに迄突進しなければならない。禽獸において、力への意志から總てのその衝動を引き出して來ることは可能である。有機的生命の凡ゆる職能をこの一つの源泉から引き出して來ることも同様である。我等は生物の諸機能

を考察して見よう。「所動的」といふのは何であるか、それは、「掌握的前進運動において阻止されてゐること、かくて抵抗及び反動の一行動である。」「能動的」といふのは何であるか、「力を擋まうとして手を伸すこと」に他ならない。「營養」とは何であるか、それは「派生的現象にすぎない。原始的の形は、一切の物を自分自身の内へつめ込まうとする意志である。」飢も第一動機と見做すことは出來ない。「不十分なる營養の結果として考へられる飢は、もはや支配者になれないところの力への意志の結果としての飢を意味する。」生理學者は、自己保存の衝動のある有機體の主要衝動と確立してしまふ前に、熟考しなればならない。生きてゐるものは、何よりも先づその力を放散したいと願ふ。自己保存はその歸結の一つにすぎない。「生殖」とは何であるか、要するに「派生的なものにすぎない。本来は、一つの意志が攝取された總てのものを組織するに堪へない場合、一つの反対意志が勢を得て來て、分離を行はせたり、本来意志との戦の後、一つの新しい有機的中心を確立したものに他ならない。」個體が性的本能におくところの異常な重要さは、種族にとつての性的本能の重要さの結果ではない。寧ろ生殖は、個體の實際的遂行であり、彼の最高の關心事であり、從つて彼の最高の力の表白である。

尙「快感」を重視するものもあるが、快感は一つの「力の感情」に他ならない。それは「到達される力の感情の一徵候」である。生命そのものが快感を追求するのではない。追求される力が到達された時に快感が生ずるのである。快感は附隨的なものであつて、自ら他を動かすやうなものではない。寧ろ意志が意欲し進むといふこと、また常にそれに邪魔をするものを征服するといふこと、それこそ快感の原因である。我等は、第一義な内的本質としての力への意志を誤認してはならない。⁽¹²⁾

凡ゆる實在の本質は力への意志である。人間も固より例外をなすものではない。だが、我等は更に一步立ち入る必要がある。等しく力への意志をその本質としても、天性に自ら優劣強弱が存在する。生物は無生物よりも強く、生物の内でも人間が最大な力への意志である。同じく人間であつても、民族と民族との間に、更に同一民族の間においても、個々人によつて、その天性上力への意志の強弱大小が存在する。而して力への意志の大なるものが優者であり、强者であり、主人であつて、力への意志の小なるものが劣者であり、弱者であり、奴隸である。兩者の相違について更に立ち入つて見よう。

優者は、「自己の内において力強いものを尊重する。また、自己自身に對する力を有ち、陳辯すべき場合と沈黙すべき場合を知り、進んで自己に對する峻厳と嚴格に耐へ、そして總ての峻厳と嚴格に對して尊崇を有つものをも、尊重する」ものである。「我等の義務を萬人の義務に貶下することを考へず、自己の責務を拠棄しようと欲せず、他に分與することを欲せず、その特權とその遂行を自己の義務に數へること。」「偉大なる責務に對する覺悟、支配的な眼光及び俯下する眼光の高遠、意志の寛闊、めつたに嘆美することなく、めつたに仰ぎ見ることなく、めつたにほれ込まないところの莊重な眼」、これらが優者の標識である。⁽¹³⁾ これらの標識を缺くもの、即ち天性弱々しく、自己自身を統制することが出来なく、盲従屈従をこととするものが、奴隸性の人である。奴隸性の人は因より主人性の人と一騎打ちをする能力がない。從つて彼等の生存を保持し、優者に對して彼等の力への意志を對抗せしめるために徒黨を組む。これが即ち愚衆であり、畜群である。畜群は、一定の定型を保存しようと努め、その定型からの墮落者に對してと、その定型からの超脱者に對してと、兩面において自ら防衛する。畜群の

傾向は、現状維持に向けられる。その内には何等の創造的なものもない。畜群の本能は中間及び介在者を最高の、最も價値あるものとして評價する。畜群の本能は凡ゆる階級別の敵である。愚衆は常に徒黨を組む。これに對して強者は獨立獨行である。然らば、強者と弱者とは如何なる關係に立つものであるか。より大なる力への意志の實現に對して、彼等は如何なる役割を演ずるものであるか。我等は先づ『人類の進化に關する結論』を提示しなければならない。『完成は最も強大なる個人の產出に成立する。そしてその個人のためには、最大の群衆が道具にされる（しかも最も氣の利いた、最も融通の利く道具にされる。）』人類が全體として成長しつゝけ、より強くなるべきことを信する時、各個人が柔弱に、平等に、凡庸になる時、そこに一つの容易ならざる危險が存在する。人類は一つの抽象物である。育成の標的は最も特殊的な場合においてすらも、常に唯より、強き人間のみである。強力なる個體が、主人が、天才が、人類進化の目標であり、大衆は只その足場にすぎない。畜群は手段であつて、それ以上のものでない。『人類は一つの標的よりもずっと餘計に一つの手段である。問題はタイプだ。人類は單なる試験材料であり、出來損ひの夥しき氾濫であり、一つのゴミ棄て場である。』^{〔註〕}

人類進化の目標は、偉大なる個人の出現である。この究極目標の實現のために我等は最も效果の多い手段を選ばなければならない。強者の出現を齎し、天才の活躍の方便となるものが價値あるものであり、善いものである。まさに從來惡とされた凡ゆるもの、凡ゆる鬭争、凡ゆる殘虐、凡ゆる害悪が、價値あるものなのである。『人間を虐待し、そして苦めよ。彼等を窮迫に追ひ込めよ。一人を他人に、一國民を他國民に向はしめよ。さうすると多分、謂はば離れて飛ぶところの餘燼から、それによつて點火された驚くべきエネルギーが、突如として天才の光りが、燃え上るであらう。』戦慄すべきエネルギー——人々が惡と名付けたところのそれ——は、人類の博識なる建築家であり、開拓者である。最も強い、最も悪い人が、今迄人類を最も前進させた。彼等は常にくり返して眠れる熱情に點火した。冷酷、殘虐、奴隸狀態、市井や心中における危險は、——恐怖的なもの、暴君的なもの、人間の野獸的なもの、邪惡的なものは、その反対のものと同じく、人間種の高揚に奉仕する。我等が高い文化と名付けるところの殆ど總てが、殘虐の精神化及び深化に基くものである。戰ひと勇氣は隣人愛よりも、偉大な仕事をして來た。今迄に不幸を救援したのは、汝等の同情ではなくて寧ろ汝等の勇氣である。『我

等が戦を抛棄する時に、我等は偉大なる生活を抛棄するのである。『平和は人間を墮弱にし、生命を萎縮せしめる。敵對的本能の減退は唯生活力の一般的減退の一結果に他ならない。要するに我等は「惡をも熱情をも缺くことが出来ない。」「惡は人間の最良の力」であり、「最高の創造者にとつて最も堅固な土臺」である。(13)

新しい基準に照されて、總ての價値は必然的に轉換されなければならない。弱者劣悪が惡となし、無價値なものとするところこそ、強者優者の善であり、價値あるものである。力の強弱、優者劣者の分離、社會における不平等と階級の存在は、改變され得ない自然的事實である。否、寧ろ促進さるべき事實である。『階級を決定し、階級を際立たせるところのものは、唯力の量である。』諸君の代表するところの力の量が、諸君の階級を決定する。『登上するところの生命を代表する一つの典型と、衰亡、解體、虛弱を代表する今一つの典型』の差別は、必然的な事實にすぎない。これを看過したり、或ひはこれに反抗したりすることは、愚劣なことに他ならない。自由主義、平等説、議會主義、民主主義、社會主義などがかゝる愚論である。これらは、徒黨を組む弱者の強者に對する反逆で、人類をデカダンに導くものである。

四、彼のイデオロギー論

實在の究極的根據が力への意志であり、生命の本質はより多き生命である。總ての他のものはそれに從屬するものであり、その手段に他ならない。人間生活における諸種のイデオロギーも固より力への意志の手段に他ならない。我等は今や彼のイデオロギー論を見るところに辿りついた。

本能が、衝動が、絶對的である。凡ゆるイデオロギーは、その役に立つ場合においてのみ成立し保存される。哲學者の意識的思惟の大部分は、彼等の本能によつて、彼等の生理的欲求によつて導かれる。表面に呈露する意識的作用の奥底には、偉大なる花崗岩が横つてゐる。意識、——表象された表象、表象された意志、表象された感情は、皮相極まるものである。意識的世界は、價値の出發點ではない。意識的になるといふことは、明かに生命の展開及び力の擴大に對する一つの附加的手段にすぎない。『諸の動物的機能は全くのところ、凡ゆる美

しき情態や意識の高頂よりも百萬倍も重要である。後者は一つの餘り物である——それがかの動物的機能のための道具であらねばならぬ限りにおいて。意識的生活の全體は、魂を伴へる、心情を伴へる、徳を伴へる精神は、抑もそれは何への奉仕において働くか。動物的根本機能に對する手段（營養を取り、又高い段階へ進むための）のあり得べき最大の完成化において。とりわけ、生命の舉揚。「身體」または「肉」と呼ばれるところのものは、名状しがたくすつと重要であり、爾餘のものは一つの小さな附屬物たるにすぎないと謂つてよい。生命の全連鎖を編みつづけて行き、しかもその道筋がいよいよ強大なものになるやうにして行くこと、これが任務なのである。』⁽²⁾

一切の精神活動は力への意志の發現である。認識は力の道具として働く。認識の尺度は、ある種族における力への意志の成長程度によつて定まる。ある種族は一定量の實在性を捕捉する——その支配者となるため、それを役立たせるために。事物が解釋及び主觀性から全然離れて、それ自らにおいて一つの属性を有するといふことは、一つの全く無駄な假設である。人は實在性の標準を理性形式の中に見出したやうに思つたのである。ところでそれらの形式の目的は、

俐巧に實在性を誤解するため、實在性を自分のものにして了ふことに存してゐたのである。嚴密なる意味においては、生成の世界は「理解」され、「認識」され得なかつたであらう。人間は結局、彼自身が事物の内へ押し入れたところのもの外、その事物について何物をも再び見出さない。認識裝置全體が抽象化及び單純化の裝置である——認識に向けられるのではなくて、寧ろ事物の占有に向けられたところの。認識するのではなく寧ろ圖式化すること、我等の實際的需要を充すだけそれだけ多くの規則正しさと形式とを、混沌情態の上に押しつけることである。要するに、客觀界の何等かのものが認識されるのではなく、生命の發展に役立つものが事物の内に持ち込まれるにすぎない。従つて認識は何等の客觀的真理の認識でもなく、事物のより完全の支配への手段である。』⁽³⁾

意識、認識が力への意志の發現であるとしたなら、諸の範疇、意識形式、觀念形態もその例外をなすものではあり得ない。理性や論理や範疇の形式において、決定力になるのは我等の中なる需要であつた。認識しようとする需要でなく、寧ろ理解及び計量を目あてに分類し編成しようとする需要であつた。「概念や、種族や、形式や、目的や、法則を一致する諸の場合を有

つた一つの世界を)想出さなければならぬ。我等自身の内なるこの拘束を理解するに當り、我等はあだかも我等がそれで以て眞實なる世界を確定することが出來たかの如く理解してはならない。寧ろよつて以て我等の生存が可能にされるところの一つの世界へ、我等自身も適應させねばならぬ拘束として、その拘束を理解すべきである。それによつて我等は、我等にとつて計量し得べく、單純化されたる、理解し得べきところの一つの世界を創造するのである。』『これこれはかうだと私は思ふ。』この評價が「眞實」の本質である。諸の評價の中に、保存及び成長條件が表白されてゐる。總ての我等の認識器官及び官能は、保存及び成長條件を眼中においてのみ發達して來てゐる。理性及びその範疇への、辯證法への信頼は、従つて論理の評價は、経験がこれらものもの人生に對して有用なること(眞實なることでなく)を證明した、その事實を示すにすぎない。(2)

何が眞實であり、何が虚偽であるか。種族の保存に役立つところのものを、我等は眞實と見做し、善と見做し、價値ありと見做すのである。最高度の活動は對象のために、それの「眞實」に對する、換言すれば、現實性に對する信仰を喚起する。力の、戰の、抵抗の感情は、こゝに

抵抗される何物かあることを信じさせるのである。「眞實の標準は、力の感情の増進の中に横はつてゐる。」眞實への意志は、固定的にする手續、持続的にする手續、かの虚妄なる性格を見えなくする手續、それを存在するものに評價し直す手續である。かくの如き「眞實」は、存在してゐたところの、また發見されるべかりしところのものでなく、寧ろ創造さるべきところの、また一つの經過に名稱を與へるところの、よりよく謂へば、それ自ら何等の目的をも有しない壓倒凌駕への意志に名稱を與へるところのものである。最も強く信ぜられた先天的「眞實」は、その上のものへ達する迄の假定である。假へば、因果律は、實踐によつてもにされたるかの習慣的信仰は、全く申分なく同化されてゐるので、あれを信じないのは種属を破滅へ向けることにもなるであらう。乍併、それはその故に眞實であるか、これを肯定するとしたら、それは奇妙な結論と謂はなければならない。覺しき信仰が存せねばならないこと、判断がなされ得ること、總ての本質的價値に關して何等の疑ひもないと、——これが總ての生物及びその生命の前提條件である。されば、何物か眞實だと思はれなければならないことは必要である。だが、何かが眞實であることは必要ではない。要するに眞實とは、「惰性、滿足を來すところのかの

第六章 ニイチエのイデオロギー論

三二四

假説、理智力の最少支出等』である。

「誤謬」は一般に眞實の反対物とされてゐる。だが、『私の考へ方によれば、「眞實」は必ずしも誤謬への反対物でなく、寧ろ最も根本的な場合において、異なる誤謬相互の一關係たるにすぎない。即ち、一つの誤謬は他の誤謬より舊く、より深く、ことによつたらその上根絶しがたいのである。我等の如き有機的存在がそれなしには生き得なかつた位である。そして他の諸の誤謬は生存條件としてその程度にまで我等を虐壓し得るのでなく、寧ろかくの如き「虐壓者等」の標準によつて測定された場合、除去され、「駁撃」され得るのである。』要するに「眞實は一種の誤謬で、それなしには生物の一定種屬が生き得ないといふやうなものである。生活に對する價値は最終に決定する。』⁽²⁾

上來我等は、生の機能としてのイデオロギー一般を考察して來た。ところが、實際の事情はより複雜である。生命的本質は力への意志であり、イデオロギーはその手段であるが、上に見たやうに、人間のうちには強者と弱者、主人と奴隸との區別が存するから、等しく生命の機能あるか、それが我等の次の問題である。

試みに現代の社會に目を向けるがよい。そこには種々雜多の主義主張が相争つてゐる。自由、正義、愛等々。だが、これらの正體は如何なるものであるか。生活力の強度を異にする諸種の人との間における力への意志の現れに他ならない。壓迫されてゐるもの等、凡ゆる種類の奴隸の間に、力への意志は『自由』への意志として現れる。これよりも強い、そして既に力を獲得した種屬の内においては、力への意志は優勝への意志として現れる。これがうまく行かなければ畏縮して『正義』への意志となる。換言すれば、支配階級が有つてゐると同じ権利の尺度への意志となる。第三に、最も強い、最も富んだ、最も獨立不羈の、最も勇氣のある人々の間ににおいては、力への意志は、『人類』への、『民衆』への、福音への、眞實への、神への『愛』として現れる。憐憫、自己犠牲として、壓服、捕獲として、奉仕の強制として、方向の與へられ得る大なる分量の力と自分自身とを本能的に同一視することとして、勇者、豫言者、皇帝、救主、

牧羊者として現れる。更に目を轉するとき、我等はまた力への意志の他の形相に遭遇する。政治上の黨派に屬するものは、權力が齎すべき幸福のために力を意欲する。功名心に燃え立つ人は、目に見える不利益や幸福安樂の犠牲を冒しても、力を意欲する。他のものは、さうしなければ彼等は倚りかゝりたくない人々の手に落ちるといふ理由を以て、力を意欲するのである。總ての人が力のために争つてゐる。

さて、現代社會において力のために相争ふ種々雜多の人間の内、如何なる種類の人間が優勢であるか。如何なる教説、如何なるイデオロギーが支配的であるか。曰く、キリスト教の愛の説教、民主主義者の平等思想、社會主義者の經濟的解放の主張などである。彼等は平和を愛好し、最大多數の最大幸福を希求する。だが、これらは徒黨を組む畜群の教説であり、強者や天才を壓縮するものであり、人類の没落頽廢を齎すものである。實に歐洲の天地は虚無主義に蚕食されてゐる。人類をその頽廢から救ふために彼ニーチェは、これらの没落的教説の真相を明かにし、その賤しき血統を辿り、そして『何故に弱者が勝つたか』を明かにした。

人間は本來健全な生活を送つて來た。未開人や古代人の生活を見るがよい。彼等は、彼等の

生活のために、彼等の發展のために如何に鬪争が必要であり、精力的活動が必要であつたかを知つてゐた。隣人愛ではなくして異種族に對する憎惡と鬪争が彼等の捷であつた。道徳の意義が未だ害はれて解釋されてゐなかつた時代においては、高貴が善であり、卑賤が惡であつた。力への意志は自然の儘に發展し、強者が人間の生活を導いた。然るにこの自然的な價値秩序は轉倒されて、弱者が勝利を占め、人類はデカダンに向つた。

弱者が勝利を得たのには色々の原因がある。第一に弱者等や病人等はより多く同感を有つて居り、より人情深いのである。彼等はより多く理智を有つて居り、一層變化し易く、複雑で、頭がよく、意志が悪い。彼等は徒黨を組んで強者に手むかふ。周期的な病氣を有ち、變り易く、不持続的である人類の一半——婦人も、強者を弱めるに與つて力があつた。彼女等は最も強いものをも難なく征服してゐる。最後に、革命の結果としての、平等なる權利の確立された結果としての、『平等なる人間』に對する迷信の結果としての社會的混淆である。優者と劣者の境界が撤廃され、彼等は社會的に參雜し、生理的に混血する。その結果として多數の弱者や劣者が生産される。かくて數量的により強いものがこれまでの最上價値を決定し、又その敵對的評

價の支配者となるに至つたのである。(1)

我等はこゝに一つの重要な事實を看過してはならない。強者、支配者の墮落は、彼等の存在理由を疑はしめるに至る。これらの墮落した支配者に比べて、低劣な、虐げられた、心の貧しい人間達は、果して無價値なものであらうか。人々はこゝに疑を起す。そしてやがて弱者の内にも徳が見出され、神の前における萬人の平等が説かれる。ネロとカラカラとが上に座した時、「最も低い人間は上に立つてゐる人間よりも價値がある」といふ逆説を生ぜしめた。かくて、最も強大なる者等の影像からあり得る限り距つてゐたところの神の影像のために——十字架の上の神の影像のために、道が開かれた。凡ゆる價値の改變者イエス・キリストが登場したのである。富貴、無神、邪惡、闘争、權力、感官等は惡となり、貧賤、愛、平和、精神等が善となつた。この劣者畜群の道德は、弱者の増加と共に勢力を得、今日に至る迄我等の生活に君臨してゐる。勢を得た弱者等は、凡ゆる手段を弄して強者の封殺に狂奔する。彼等は、その上に立つ例外的なもの、より強きもの、より大なるもの、より賢きもの、より恐るべきものを説得して彼等の見張番に、牧羊者に、衛兵にする。彼等は、組織的な偉大な體系を建設した。これ迄の

最高價値である宗教、道德、哲學は、實に徒黨を組める弱者等が強者を壓服する手段に他ならない。それらは「贋造」であり、「欺瞞」であり、「虚言」であり、「手品」であり、「假面」である。それらは「曝露」されなければならない。奴隸くさき評價、「道德」と呼ばれる偽善、一般的投票等は、「最も低劣な者等がよつて以て彼等自らをより高き者等に對する律法として規定するところの制度」に他ならない。今迄の最高價値であるところの「哲學や、宗教や、道德はデカダンの徵候」である。我等は先づ道德を検討して見よう。

道德は、ニーチェの縦横無盡に奮戦した領域であつた。彼は既に少年時代から傳統的な腐敗道德に懷疑を向けた。彼の幼時の家庭の敬虔嚴肅な宗教的雰圍氣は、彼に歐洲の天下を支配したキリスト教的道德の核心にふれしめた。生氣横溢せる古代の世界と墮弱卑賤なるキリスト教は、彼の眼前に雲泥の對照をなした。彼はこの奴隸的没落的道德の血統を辿り、これを批判して、彼の無道德の道德に到達したのである。

道德も一種のイデオロギーであり、その性質は上述のイデオロギーの一般的特徴から外れる

ものではないが、この道徳なるイデオロギーには、他のイデオロギーから區別される特殊性がある。「總ての徳は生理的情態である。とりわけ主要なる有機的職能が、必要なるもの、善なるものとして感ぜられる。總ての徳が本來精練された欲情であり、高められたる生理的情態である。」憐憫及び人類愛は、性的衝動の發展であり、正義は、復讐衝動の發展である。名譽は、相似たるもの、力を等しうするものの承認である。道徳はある生きものの生活條件に關係のある、一つの評價體系である。道徳的判断は、生理的昌榮またはその反對の経過が、並びに保存條件及び成長條件の意識が呈露されるところの、徵候及び符號として理解さるべきものである。本来は如何なる道徳的現象なるものもない。寧ろさうした現象に對する一つの道徳的解釋があるのみである。かうした解釋そのものは、道徳を超越してゐる。道徳的評價は要するに一つの説明であり、解釋の一つの方法である。説明そのものは、ある生理的情態の徵候であり、並びに有力なる判断のある精神的水準の徵候である。だが、説明するのは何者であるか、我等の欲情である。道徳は一つの有用なる誤謬、一つの必然的に考へ出されたところの嘘である。道徳の本質が明かになれば、その基本問題であるところの善惡の基準も自ら明かとなる。「何が善であるか——人間における力の感情、力への意志、力自體を高める總てのもの。何が惡であるか——懦弱に由來する總てのもの。」⁽¹⁾である。

道徳の一般的特質は上述の通りである。だが、強者と弱者によるイデオロギーの二元性によつて、道徳にも自ら主人の道徳と奴隸の道徳に分かれる。支配者にとつては、彼等自身の權力や幸福を高め、彼等の優越を増進させるものが善である。彼等の横溢せる精神力や肉體力を發散しようとする意志が、彼等の善の原動力であり、それが弱者に對する憐憫となつて現れる。彼等にとつて、善とは高貴であり、惡とは下賤である。生活闘争の殘敗者たる奴隸は、支配者の抑制と壓迫の苦痛に耐え、或ひはこれからのがれようとし、總てかゝる傾向は彼等にとつて善である。では現在の道徳は如何なるものであるか。

ヨーロッパの道徳全體は、畜群の功利といふことを根據にしてゐる。平和、公正、節度、謙讓、恭敬、細心、勇敢、貞潔、正直、誠實、敬虔、廉直、信任、歸依、憐憫、世話好き、赤心、簡樸、溫良、正義、寛宏、寛仁、從順、無私欲、嫉妬心からの超越、人の善さ、精勤、これらが賞讃される情慾及び欲望であつた。だが、我等は用心しなければならない。これらの諸性質

は一定の意思及び目的に對する、往々一つの邪惡なる目的に對する手段に他ならないことを。それらのものは、何れも皆それらのもの自らのために「善」と考へられるのではなく、寧ろ既に「社會」や「畜群」の尺度の下に、それらの目的に對する手段として、それらのものの保存及び進歩にとり必要なるものとして、又個體における一つの實際的畜群本能の結果としてである。種々の畜群本能が、弱者の力への意志が、それらの背後に働いてゐる。即ち強大なるもの及び獨立せるものに對する畜群の本能、幸福なるものに對する苦しめるもの及び失敗せるものの本能、非凡なるものに對する凡庸なるものの本能が働いてゐる。通俗人にとっては、高貴ならざるものはより高いものであり、出來損ひの人にとっては、自然に反したものはより高いものであり、凡庸な人々にとつては、中位なものはより高いものである。傳統的な道徳的評價は要するに、力への意志、より強い人々に反抗する畜群の意志に役立つ虚言及び誹謗術の歴史に他ならない。道徳は本質的に楣であり。防衛手段である。そしてその限りにおいて發達しきらない人間の徵證である。發達しきた人間は何よりも武器を有つてゐる。彼等は攻撃的である。實際、宗教的又は道徳的判断の優勢は、常に文化の低級な徵證である。奴隸道徳は、生命の享樂

に、生命に対する謝恩の心に、生命の美化、高貴化に、その認識、その展開に對して有害である。それは人類を頽廢に導く。されば我等はそれに對する殲滅戦を決行しなければならない。總ての價值は轉換されなければならない。

理性の活動であると謂はれる哲學も亦イデオロギーの一種である。それも生治の一機能であり、力への意志の一手段である。如何なる程度迄我等の理智も亦生存條件の一結果であるか。我等はそれを必要としなかつたならば、それを有しなかつたであらう。又そんな工合にそれを必要としなかつたならば、他の仕方でも生き得たならば、そんな工合にそれを有しなかつたであらう。理性や論理や範疇の形式において、決定力となるのは我等の中なる需要であつた。認識しようとする需要でなく、寧ろ理解及び計量をめあてに、分類し編成しようとする需要であつた。諸の範疇は、それが我等の生存條件であるといふ意味においてのみ「眞實」である。理性や範疇は、多くの摸索と試験とを経たあとで、相對的效用によつて眞實を證明されたかも知れない。それが全體として捕捉されたところ、全體として意識に入り込んだところ、又それが

命令されたところ、換言すれば、それが命令者として働いたところへ來た。それから後理性の範疇は、ア・ブリオリとして、経験を超越したものとして、拒否すべからざるものとして通用した。尙且つ思ふにそれは、種族及び種属の目的へのある一つの合適性より以上の何物をも表白してゐない。即ち、その效用だけがその「眞實」である。

論理は殆ど萬能なものやうに信せられてゐる。だが、論理は、「同一の場合があるならば」といふ條件に結びつけられてゐる。全くのところ、論理的に思惟され推理されることのためには、この條件が先づ充たされたものとして假定されなければならぬ。換言すれば、論理的眞實への意志は、凡ゆる現象の原理的偽造が假定された後、始めて行はれるのである。そこで二つの手段を用ひ得るところの一つの衝動が、こゝに主権を振ふことになる。その第一は偽造、第二はそれ自らの見解の实行である。論理は眞實への意志から出て來るのでない。論理は、我々自身から工夫されたる一つの存在圖式に従つて、眞實の世界を理解しようとする企である。より正しく謂へば、我等にとつて方式化し得べき計量し得べきものにしようとする企である。

科學は、自然を支配する目的で、自然を概念に變化する。それは「手段」といふ標題の一部で

ある。

上に述べたのが、理論、哲學の一般的性質である。この領域においても強者と弱者の闘争があつた。既にギリシャにおいて賤民ソクラテスが弱者の武器としての哲學のために奮闘した。弱者が勝利を博した後、認識の領域における畜群が學者となつた。爾來奴隸的没落的教説が唱へられて來たのである。理性を盲信するこの灰色の概念の哲學は、生命の發展を阻止するものであり、我等はそれを葬らなければならない。自然は再びその王位に復されなければならない。そして實在の本質たる力への意志の最高表現、究極的目的、最高の思想の體現者たる超人への努力がなされなければならない。

(1) エーチエ、「力への意志」、生田長江譯、二六四節。以下單に數字をあげた場合は、同書の節數を指す。

(2) 二五三、三九九、二五七、七。

(3) 六八八、六一九、六二七、六三二。

(4) 一〇六七。

四、彼のイデオロギー論

- (5) 六八九、六三六。
(6) 七二八、七〇一、七〇四、六六〇、六八八、六九二。
(7) 六四一、六四二。
(8) Riehl, A.: Fr. Nietzsche, S. 105, 106—107. 参照用。
(9) 六四七、六八一、七〇一。
(10) 六五七、六五一、六五〇、六八〇、六九六。
(11) Riehl: a. a. O. S. 110—111.
(12) 六九〇、三九八、七一三。
(13) Riehl, a. a. O. S. 82, 85, 86, 92, 125, 110, 98, 99.
(14) 八五五、八五八、八五七。
(15) 六七四。
(16) 四八〇、五六〇、五八四、六〇六、五〇三、五一五。
(17) 五一五、五二一、五〇七。
(18) 五三三、五四四、四九七、五〇七、五三七、五三五、四九三。

五、彼のイデオロギー論の性格

(19) 八六四、四〇一。

(20) 一一五五、一二五八、四〇一。

Riehl: a. a. O. S. 126.

生の哲學の創始者としてのニーチェは、近時新に學徒の注意的になつてゐる。現代哲學の特性的な根本概念である「生」と「實在」とは、元來彼とキルケゴー尔によつて提唱されたものと謂はれてゐる。哲學體系としてのニーチェの體系はさて置いて、こゝでイデオロギー論としての彼の體系について見よう。

カール・マンハイムは、知識社會學の二つの源泉としてマルクスとニーチェを擧げてゐる。マルクスが經濟に重點を置いたのに對して、ニーチェは人間の本能構造を重要視した。彼は、この人間の本能の構造の理論と、プラグマティズムを思ひ起させる認識論とによつて具體的な觀

五、彼のイデオロギー論の性格

察をなし、特定の思惟様式を貴族的文化及び平民的文化の兩典型に社會學的に歸屬した。近代社會の頗るの認識とその救濟策が彼の主要問題で、明確な實踐的動機は彼の體系の一特色である。彼は先づ近代社會の諸種のイデオロギーを批判した。その際に、諸種の没落的イデオロギーの真相を究め、その「賤しい血統」を通り、果實からそれが生長して來た土地を尋ねた。この究源的な態度、即ちイデオロギーをその地盤に還元することも、その特徴の一つに數へられるやう。凡ゆる實在の究極的事實は力への意志であり、力への意志の特殊的な一つの場合が生である。イデオロギーは生の機能であり、力への意志の一手段である。善惡眞偽の基準もこの基本的な事實に求められなければならない。善と惡、眞と偽といふ反対のものが存在するのではない。自己及び自己の種族の生活を維持し促進するものが眞であり善であつて、その反対のが偽であり惡である。反対の立場に立つ人にとっては逆の判断が妥當する。要するにイデオロギーは『虚言』であり、『欺瞞』であり、『假面』であり、『手品』であり、『贋造』であつて、『曝露』されなければならないものである。而して人類の發展のためには、弱者は却けられて強者が躍進しなければならない。これが彼のイデオロギー論の骨子である。

マンハイムの謂つたやうに、彼のイデオロギー論は、マルクスのそれと相對して一つの潮流の源をなすものである。彼は、力への意志は心理的事實ではないと斷言するが、この形而上學的設定は、要するに人間生活における心理的事實の一つを、即ち權力本能を抽出してこれを重視誇張したものである。この傾向のイデオロギー論を説くものとして、グムプロウイチ、ラツェンホーファー、オッペンハイマー、等を擧げることが出来る。更にヴィザーも權力本能を重視する人である。

所謂權力本能は、何處迄人間の先天的特質であらうか。人間生活においてそれははたして最も根本的な事實であらうか。權力的事象が人間生活において重要な現象であるのは事實である。未開の封鎖的社會における異種族間の鬭争において、偉大な鬭争力を有することは、同時に生存を意味し勝利を意味する。だが、人間は權力本能を満足するために鬭争するものであるか、それとも生活のための鬭争が所謂權力本能を發生せしめたものであるか、科學的研究をするところであらう。事實、この權力本能の畸形的病的發展は、自由競争が社會生活の原理となつた後のことである。權力説による人間生活の説明が如何に薄弱なものであるか

は、既にデューリングに對する批判においてエンゲルスの明かにしたところである。

社會生活を科學的に説明し得ないこの心理學的イデオロギー論は、現在においても偉大な體系を構成してゐるが、それは如何なる原因に基くものであるか。皮肉なことには、我等はこゝでニーチェの一つの眞理を肯定しなければならない。即ち、それが科學的であるか否かを問はず、ある階層の人々の生活に都合の良い理論であるからである。イデオロギーを生活の機能としてこれを完膚なきまでに剔抉したのは實に讀者をして快哉を叫ばしめるが、生活を力と力の闘争として物質的經濟的關係を排除したところにその觀念論的制約が存する。

ニーチェのイデオロギー論の觀念論的性格の考察において、我等は種々の點に留意する必要がある。社會生活を觀察し説明する場合に、物質的生活關係に著目しないで抽象的理論や思辯を弄ぶドイツ哲學の傳統は、その原因の一つに數へられよう。ドイツ哲學のイデオロギー的性格については、スチルナッハを取扱つたところで述べた。十九世紀の中葉からドイツ市民階級は、觀念論を見捨てて實踐に入った。だが、エンゲルスが我等に教へたやうに、觀念形態は一度構成されるとそれ自らの生存を保つて行くものである。殊に新たな意味において觀念論が要求され

た時に、それは新に發展をする。近代のドイツ哲學の觀念論的性格は、固より新たな生活關係から説明さるべきものであるが、過去の傳統の影響もその一原因に數へられやう。ニーチェの場合はその一つの事例である。

ニーチェのイデオロギー論の根本的特徴は、併し、その社會的地盤から説明されなければならない。宇宙の究極的實在を説く彼の哲學にも、社會的關聯が反映する。彼は過渡期の哲學者と謂はれてゐるが、これは、彼がある社會的危機に生活した人であることを指すものに他ならない。彼の活躍した時代に、ドイツの產業資本主義は帝國主義に發展し、自由主義、民主主義、機會主義等の諸イデオロギーは新しい生活關係と明かに乖離するものとなつた。第二インタナショナルの社會主義はこの難局を收拾するに餘り無力であつた。そこで、彼は、社會的危機を救濟する爲に彼の教説を説いた。彼の理論は、大戰後に勃發したフ・シズムの先驅であつた。「力への意志」と「レシテ」、「永劫回歸」と「エリテの周流」とを對照して見るとき、彼の理論がフ・シズムの公認哲學たるバートの體系と如何に類似してゐるかを伺ふことが出来る。彼の哲學は今やフ・シズムによつて公然と援用されてゐる。この點において我等は彼のイデオロ

ギーの社會的性格を伺ふことが出来るのである。(尙この點について、新明正道教授の『ニイチエ哲學の社會學』(國家學會雜誌、第四十七卷第六及び七號)において詳論があるから、それについて見ることを望む。)

事項索引

ア 行

イデオロギー 128, 132, 136, 192

102, 146, 152, 160, 164, 174

106, 114, 116, 118, 120, 122

124, 126, 128, 130, 132, 134

136, 138, 140, 142, 144, 146

148, 150, 152, 154, 156, 158

160, 162, 164, 166, 168, 170

172, 174, 176, 178, 180, 182

184, 186, 188, 190, 192, 194

196, 198, 200, 202, 204, 206

事項索引

カ 行

隠蔽 31, 52, 142

エトス 150

感覺 130, 131, 132, 134, 136, 138

139, 140, 142, 144, 146, 148

149, 150, 152, 154, 156, 158

159, 160, 162, 164, 166, 168

170, 172, 174, 176, 178, 180

182, 184, 186, 188, 190, 192

194, 196, 198, 200, 202, 204

206, 208, 210, 212, 214, 216

218, 220, 222, 224, 226, 228

230, 232, 234, 236, 238, 240

イデオロギーの系譜学 335以下

山本。

イデオロギー論 12, 14, 22, 28

20, 22, 110, 112, 114, 116

118, 120, 122, 124, 126, 128

130, 132, 134, 136, 138, 140

142, 144, 146, 148, 150, 152

154, 156, 158, 160, 162, 164

166, 168, 170, 172, 174, 176

178, 180, 182, 184, 186, 188

190, 192, 194, 196, 198, 200

202, 204, 206, 208, 210, 212